

---

100eyes'undergroundsuperhero

偽薬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

100eyes・undergroundsuperhero

### 【Nコード】

N3036E

### 【作者名】

偽葉

### 【あらすじ】

甘い蜜。愛しい人と別れて引きこもり。半年経って外へ出て、いわくつきの店で知り合う謎の男、リヨウ。フェチな妖怪小説ゲオマ続編。 現在中断

夜。  
外から聞こえる赤ん坊の泣き声に、もう夏も近いのだなと思い知る。

日中の強い日差しに散々灼かれた土のにおい、日なたのにおいが  
緩い風に乗って仰向けに本を読む私の鼻に届く。

本はもう何度目かも忘れた推理小説。

筋立てだのトリックだのはあまり好きではなかったが、細かい設定がなんとなく気に入っていた。

そろそろ復学の手続きをしたほうがいいのか。

半年ほど前に精神的に痛手を負い、とても無気力になってからほとんどの時間を家の中で過ごしてきた。

友達からはメールをもらったり電話をもらったりするもの、何も、息をするのも億劫なまま今に至っている。

親などはこのままうつ病になるんじゃないかと心配しているようだが、私本人は案外楽天的で、いつかどうにかなるぐらいにしか思っていないかった。 実際いい加減引きこもり生活にも飽きがきていて、外に出たくなってきているし、欲しい物もちらほらあるからアルバイトもしなくてはなるまい。

いや…まあウン。

なんにしても部屋を、外に出るか、私は立ち上がった。

父の自慢のウォークインクローゼットから、去年の秋物のワンピースをひっぱり出してきて袖を通してみると、ただでさえ細かった体がさらに細くなっていた。

姿見に映る自分の姿。

天然の赤毛に白い肌、色素の薄い瞳、桜色の唇、小柄な体格。なんというか、北欧圏の中学生みたいだ。そばかすでもあれば完ぺきである。

自他共に認める可愛い顔：鼻で笑う。しかし実際、私は学校でもてるのだけど、そんなもの結局私のお気に入りの男子に見初められなければ意味はないのだ。

蜜が好きになる男って特殊じゃんとは友達の弁。

ちなみに私は雨居蜜<sup>アマイミツ</sup>という冗談のような名前の十八才だ。

それはいいとして、特殊とはどういうことだろうか。

私は確かに見た目であまり好き嫌いを判断することは少なく、なんというか、うまく説明はできないのだけど、その人の持つてる雰囲気重視するところがある。ただその、雰囲気重視で好きになった男子を友達が否定しなかったことはない。

選ぶ男の顔面偏差値が低い、と。

どうしてあんなの好きになるの、と。

蜜ならもつと上狙えるじゃん、と。

上とはどういうことだろうか。

いつてる意味はわからなく、それでも私のことを気遣っている感じは伝わるから、私はその都度へらへらと笑って誤魔化すばかりだ。

どうにも世の中平等社会を標榜してはいるけれど、目に見えないヒエラルキーは多々あるようだし、且つまた価値基準は人それぞれだ。格差があるのはある意味しようがないし、私はそれは必要悪だと思う。でも価値基準の場合、そんなものはみんな個人的なものに留めておくべきではないだろうか。他人に押し付けてはいけない。

シルバーの指輪を何気なくいじる。

私は半年前に辛い失恋を経験した。

相手は大学の教授で犯罪心理学のエキスパート。本も何冊か出版

してるくらいインテリ。年齢はよく知らないけど上なのは確実に、白髪だったし禿げてもいた。煙草とコーヒー、それと革装丁の分厚い本だけで生きていそうな人だった。

私は彼を闇雲に愛した。

彼もまた、私を愛してくれたと確信している。

私の人生でもっとも甘い、それこそ蜜のような数週間が過ぎ、そして、彼が死病に侵されていることが発覚した。

私はその事実を聞き及んだ時点ですでに余命ひと月だったらしい。彼は大学を辞め、生まれ故郷に帰った。何度も何度も泣いて連れて行ってくれるよう懇願したが、どうしてもそれは受け入れられなかった。

私は今も、彼の故郷がどこにあるのか知らない。

結局はなんの力もないただの小娘であることをいっただけ痛感した出来事だった。

そして昨日、友達からの連絡で彼が逝ったことを知らされた。余命ひと月からずいぶん頑張ったものだ。不思議と涙は出ず、漠然とした不安と補いようのない寂寥感と、私の半分を失ったような喪失感に苛まれた。

はつきりと別れを告げられてはいないだけに、そうした気持ちになっただけだと思う。

ふと顔を上げると、鏡のなかの私は泣いていた。

ああ、ひとはこのような顔をして泣くのだなと他人事のように思いつつながら見つめていると、後から後からとめどなく涙があふれてきて、やがては私は、顔を覆い膝を折って声を殺していいだけ泣いていた。

やっぱり無理矢理でも一緒に行けば良かった、とそう思う。

生まれ故郷とはいえ、あの人は寂しく逝ってしまったのではないか。それを思うと胸の奥から次から次へと哀しみが溢れてくる。

死者の気持ちなど死者にしかわからないというのに。

いいだけ泣いて立ち上がって、私は羽織る物だけ持って家の外に出た。

眼は痛かったが宵闇をわたる風は程よく乾いていてとても頬に気持ち良かった。どうせ今日は父も母も戻らない。隣県で一人暮らしをしている姉もこの二週間ほど顔を見せていない。つまりは私は今日、出歩こうが何しようが誰も気に留めないのだ。

なんにしても、久しぶりに夜の町を徘徊するのも悪くない。

最近は私の住む石動町も治安が悪くなりつつあるそうだが、それでもたかが知れてる。せいぜい中高生がコンビニの前でお酒を飲んで騒いだというくらいだろう。

但し、数年前に駅前で起こった原因不明の爆発事故は怖かった。

まだ赤ん坊が泣いている。

はたしてどこの家だろう。

近所にそんな若い夫婦はいただろうか。

私の住んでいるのは昔からの住宅地で、隣近所皆顔見知りだ。だいたいがウチと似たり寄ったりの家族構成と年齢だったと思う。もしかすると出産で里帰りしている娘さんがいるのかもしれない。つらつらとそんなことを考える。

子供はまだ欲しくないけど、なんかそういうのついていいなと思う。次第に遠ざかる赤ん坊の声を聞きながら、私は当て所もなく歩いた。

今の時間では駅近くのカフェも閉まってるだろう。

とりあえずは人通りを求めて商店街のほうへ足を向けた。

と、後ろから物音した。

少し神経を向けると、すぐにそれは自転車だと知れた。気持ち路肩に寄り、顔の向きをやや道路側にし、自転車の様子を横目で確認した。半年ほど世の中と関わりを絶っていたが、流石にその程度の警戒心は残っている。

自転車に乗っていたのはシーズーみたいな顔をしたおばさんだった。とりあえずは警戒を解く。刃物を隠し持っているかもしれない

などといった、そんな低い可能性までは考えない。なんとも中途半端な警戒である。

シーズーおばさんは何か空中に毒づきながら颯爽と私の横を通り抜けて行った。残り香がトイレの芳香剤を想起させた。

あの人は通り魔の心理を熱心に研究していた。

人が人を殺す理由を延々と。

小娘の私にはあまり興味のあるテーマではなかったけど、その考察を熱っぽく語る彼の口元が大好きだったから、私は彼によく研究の話をせがんだものだ。

月は明るい。

雲の流れが速い。

このままどんどんと夏になっていくのだろう。

随分とゆっくり歩いてるつもりだったが、早くもふくらはぎに張りが出てきた。高々半年の厭世生活でまったくいやになる。やはり引きこもりなどするべきではないのだ。

その後何度か道を曲がったと思う。

気づくと薄汚れた路地裏に入り込んでいた。

お酒のケースとポリバケツ、用途不明のワイヤー入りチューブ。まんべんなく広がるゴミと砂埃。自動車はおろか人すら通るに危うい道だ。その裏路地の有様に気づいてすぐ、これはまずいと思った。こんな場所では誰かに何をされても入り込んだ私の不注意だろう。それはそうなのだが、石動町にこんな悪所があったらどうか。

ひとつ、看板が目に入った。

石：たたみ：石畳、か。なんとなく聞き覚えのある店名だった。

どうやらバーのようだが、営業しているのかいないのか判断がつかない。いずれにせよ未成年の私には関係のない場所だ。別に優等生ぶるつもりはなく、わざわざ無理して法を犯すほど物好きでもないというだけで、そもそもお酒も好きではない。

ただ、小さな看板の傍にでん、と止められた白いビッグスクーターには強い興味を持った。

うん、白も悪くない。二つ目も可愛いかもと屈んで眺めていると、鞆の奥底が細かく振動しているのに気づいた。

携帯電話だ。

姉からだった。

姉からメールがくるのは極めて珍しい。

別に姉妹仲が悪いわけではないが、顔を合わせても特別会話はない。趣味も生き方も箸の持ち方も違う、顔も背格好も声もまるで似ていない。それも仕方ないのかもしれない。

メールの内容は不可解なものだった。

いわ

その一言。

レスを送るうにも意味がわからなさすぎてどうにもならない。

そういえば過去、酷く酔っ払った姉が当時の彼氏と間違えて電話をかけてきたことを思い出した。姉は隣県で水商売をしている。生きることすなわちお金を使うことな人だから、そうした商売が一番手っ取り早いのだろう。

結局レスは何も送らない。

大事な用であるなら重ねてメールしてくるか、直接電話してくるだろうし、どうせ誤送信なのだ。

ぎい、とバー石畳の木戸が開いた。

私は別に悪いことをしているわけでもないのに咄嗟に携帯電話をしまい、顔を伏せ上目遣いに戸口に目をやった。

「あ、可愛い」

顔を覗かせたのは精悍な顔つきの豆芝だった。

一度私に目をやり、ふかふかと外気の匂いを嗅ぎ、くしゃんと実

に愛らしくくしゃみをしてまた顔を引っ込めてしまった。私はそれにつられて店の中を覗いてみた。薄暗い店の奥にぼつんと灯かりが灯っていた。

誰かいるのだろうか。

近づいてみると案内店の外観は綺麗なものだった。ドアノブのところ準備中の札も見える。今日がたまたま休みだけで普段は営業しているのかもしれない。

それにしても石畳、どこで聞いたのか。

友達との会話でその店名を耳にした記憶はあるのだが、はたして内容までは思い出せなかった。どうにも消化不良な感じで気持ちが悪い。

閉まりきっていないドアの隙間から男の声が漏れ聞こえてくる。

正確な内容まではわからないが、切れ切れに届く単語から類推するに、どうやら私の話をしているようだ。

そんなに怪しい人物に見えたのだろうか。

いや、待て。

私の様子を覗いたのは人ではなく犬だろうに。

断絶期間半年でその認識のズレはまずい。私は無意味に慌て、勢い店のドアを開けた。どうしてそうしたのか、そうしてどうするつもりだったのか、きちんと考えがあつての行動ではない。

人がいた。

男が一人、陰鬱そうな面持ちでカウンター席の一番奥に座っていた。

私は店の中に入った。

外気はそれほど低くないというのに、店内のコンクリート床はとも冷え切っていて、いやな冷たさが靴下を履いてない足にじんわりと伝わってきた。

なんで私は店に入ったのか。

鼻孔に届く匂いでわかる、男の吸っている煙草の銘柄が彼の吸っていたものと同じだったから。多分その程度のもの。

男は私を見るでもなく、

「今日は休みだ」

と実に抑揚のない声で告げた。

当然私はそれを理解している。そもそもがどうしてここに立っているのか自分でもうまく説明できないのだ。

私はとりあえず謝った。

「あの、犬が可愛かったもので、つい」

男は無言で煙草をくゆらせている。相変わらず私に一瞥もくれずに。

薄暗くていまいぢわからないが声の感じといい、結構年若いのではないだろうか。しかし栗色の前髪が邪魔で表情はほとんど読み取れなかった。

なんとなく堅気には見えなかったが、なんとというか危険な感じも受けなかった。

ただそれは勝手な思い込みだ。印象に過ぎない。それこそ危険だけれど…。

私は男の手元を見ている。

特別珍しくもない、有り触れた銘柄の煙草。

家族は誰も煙草を吸わない。友達にも不思議とその銘柄を吸っている者はいなかった。

そんな単純なものにほんの少しだけ運命的なものを感じたのだ。

どうかしてると誰かにいわれても抗弁の余地はない。

「あの…」

「用がねえなら出てけ」

用はないが男の尊大な態度が気に障った。だからといってどうするということはない。

気づくと犬は男の腰掛けたスツールの真下でじっと私の顔を見ていた。

「犬…」

男はアルマイトの灰皿に煙草を押し付けた。

「それとも何か用があるのか」

そういった男の両目は、ただの空ろだった。私はなんだか見てはいけないものを見たような気がして思わず目を逸らした。その反応も行動もまるで無意味だろう。

なにか言葉を返さなくては。私はそう思っている。別にそんなことせずとも、おとなしく店を出れば済むことなのだが。

「…あ、あの。ええと、そう。アルバイトとか雇ってないかなって思ってる」

不意に男の肩越しに、天井からぶら下がるロープが視界に入ってきた。

ホームセンターにしか売ってなさそうな太いマニラ縄で、末端にはティアドロップ型の輪ができている。

「ああ…ここ」

そして私はやっと思い出した。

ここは、この石畳という店は、数年前に若い女が首つり自殺をした店だ。

当時、もともと静かで起伏のない町である石動でのその自殺事件に、虚実入り混じった噂が飛び交ったものだ。一部の口さがない連中に、その女は自殺後死体が盗まれたのだ、生き返ってあたりを徘徊しているのだ。まるであり得ない尾鱗付きで語られた、その発端となった店なのだ。

私は自然ロープから目が離せなくなった。

男は空ろの目を私に向けることなく、

「あんだ、地元かい」  
と尋ねてきた。

私は無言で頷き、続けて小さくハイといった。

「悪趣味だろう、こついうのは」

「え。あ。あの。そのロープってやっぱり」

「いろいろと縁のある女でね」

少し寂しそうに男はそういって、未練だなこつして待っていると繋

げた。

酷く聞き難い声。そもそも根掘り葉掘り聞く必要もないのに、私はいやな焦燥感に苛まれている。

多分私自身が欲しているのだ、目の前の男との会話を。

犬がじつと見ている。黒い眼と黒い鼻、その三点の黒が視界の隅から私に奇妙な圧迫をかけている。多分それは気のせいだ。

今頃気づいたが、店内には音楽がかかっていた。

音量が小さいため切れ切れに耳に入ってくる。

ジャズか、ロックか。

ロックかな。

「そ…その方ってちゃんと…ちゃんとじゃなくって、その、死んだんですよね…」

私がそういうと男は笑った。陰険そうな第一印象とは裏腹に随分と屈託のない笑みだった。

「聞いたよ。タミ、ああ、自殺したのタミコっていうんだが。タミが死んでからあることないことこの界隈に広まっていたんだろ」

「え。はい。あの…死体が消えた、とか歩き回っていた、とか」

アハハと続けて笑う。我ながら乾ききった愛想笑いだと思った。

「たちの悪い冗談ですよね、ほんと」

男はそれには何も返さず、ただ黙って煙草に火を点けた。

私は思う。ここで自殺したのは、男の恋人なのではないかと。

「本当、たちの悪い冗談です。残された人間の気持ちを考えていない、酷い冗談…」

「いや」

煙気とともに男は私の言葉を否定した。

「冗談なんかじゃない。すべて本当だ」

「え？ 本当にあつた話、なんですか？」

私の問いかけには答えない。

犬がへらつと舌を出す。

「猛者」

「もさ？」

「その犬の名前」

「突然いわれても」

「知りたそうに見えたから」

すると男は掛ければいいと顎で空いている椅子を示した。

「あの…」

「リヨウだ」

「はあ。リヨウさん。目が不自由なのでは？」

「まあな。見てわかるように俺には顔面の目がない」

「顔面のつて…そうですよ。失礼しました」

私はいわれるまま空いているひとつに浅く腰かけた。

無意味に犬の眉間をコリコリと搔いてみる。もさは再びへらっと大きく赤い舌を覗かせた。

「あの、どうしてそのロープ片づけないんですか？」

私だったら恋人が自殺した事実を喚起させる遺物など一切目に入る場所に置かない。綺麗さっぱり消去して封印して、甘ったるい思い出だけに縋って生きるのだ。

「別に意味はない。片付けるのが面倒なだけだ」

嘘だ。私は勝手にそう思っている。

そういえば。

「あの、さつき、ええと、死んだタミさんが生き返ったとか…」

「いったな」

私は気持ち前のめりになり、

「それは本当ですか」

尋ねた。

その時の私は、少し現実離れた話に逃避したかっただけで、実際リヨウの話信じていたわけではない。信じさせてとは願っていたが。

「どうだろうな。生き返ったのかどうなのか。ただ、死んでいたのがまた動き出したのは事実だ」

「どうやって」

「なにがだ」

「どうやって生き返ったんですか」

ほんの少しだけ熱をこめて私がそう問うと、リヨウは軽く顎を上げて、なに民間療法だよといった。意味がわからなかった。私の非現実的な思いはすぐさま萎え、今度はもさの頬を両手に挟みながら、  
「それでアルバイトは」

と違うことを訊ねた。我ながら散漫とした問い掛けだと思う。

リヨウは手は足りてると素っ気なくいった。店の様子を見るにそうとも思えない。ただ、そもそも自殺のあった店。自殺に使ったロ―プもそのままの状態で、はたして客は入るのだろうか。それこそ余計なお世話か。

私は食い下がった。

「バイト料はいららないです。私も社会復帰のリハビリがしたいだけだし」

半分は本当だが、実際お金は欲しい。

どうしようもない与太話とわかっていても、やはりどこかで死人が生き返った話が引つ掛かっている。

リヨウは凜々しい眉を奇妙に曲げ、

「そうまでして働きたいなら別なところを探せばいい」

と、実にもっともなことをいった。

多分私は目の前の盲目の男に亡き彼を重ねている。顔はちつとも似ていない。背格好も近くはない。声も違う。ただ吸っている煙草と、笑った時の雰囲気少し似ているだけだ。

それこそそんな男、世間にはごまんというはずだ。

「そのかわり私も、来たい時だけ来て勝手に手伝って勝手に帰るか  
ら」

勝手な申し入れだ。

そしてこの言葉は、私が彼と付き合うようになったきっかけの言葉でもある。

「ふん。それじゃあ来た時は精々便利に使わせてもらおう」  
私はリヨウのその言葉に気が遠くなるような感覚に襲われた。

とりあえず今日は帰れといわれるまで私はぼんやりと座っていた。  
リヨウは家までもさを付けてくれた。そのへんの男よりもよほど  
頼りになるのだそうだ。

わかつている。

仮にリヨウに興味がわいたのだとしても、所詮は彼の代替品。私  
の心の傷が塞がるまで、私が私の中だけで勝手に盛り上がってい  
ばいいのだ。

もさにここでいいからというところらの言葉がわかるのだろう、  
もふと頷くように一声吠えて小さな守護者は来た道を軽快に引き返  
していった。

物凄く不思議な体験をしたような気になっているが、それは半年  
間人付き合いをほぼ絶っていた私だからそう思うのかもしれない。  
明日の夜、あの店を再訪してみれば今のこの気持ちはどういった  
種類のものなのかある程度判別がつかだろう。

とにかく今日は疲れた。

親は帰らない。

シャワーも浴びずに寝よう。

その夜姉が殺された。

私がそれを知るのはまだ先のことである。

すべての歯車が狂い、狂った位置でまた廻りだす。

「皆さんいいですか。頭や心臓、そして丹田には神が宿っていると  
お考えください」

白装束に兜巾姿の顔の長い男が鹿爪らしい表情で何やらについて  
講義している。

熱心な顔つきで聴講しているのは年老いた男女。

場所は石動駅西口に屹立するガラス張り十階建てビル内の、学校の  
体育館ほどもある多目的ホールであり、そのビル全体が現今の日  
本でもっとも勢いのある新興宗教、その名もずばり長寿教の本部で  
ある。

講義を行っている山伏風の男は長寿教の教祖、日比野子雄、その  
人だ。

講義の内容は実に単純で、明快な理論で長寿になる方法を説いて  
いる。

信じる信じないこそ個人の裁量だろうが、教団に入会せずとも購  
入可能な丸薬の売れ行きひとつをとってみても長寿教は大成功して  
いるといわねばならず、加えて苦情の聞こえないのを考慮するに、  
彼の作り上げた長寿教にはなにかしら一塊の真理があるものと思わ  
れる。

聞くところによると数か月前、死病に取りつかれた老人（ちなみ  
に石動町で一、二を争うお大尽である）に対して子雄が処方した丸  
薬が見事病を癒したのだという。すると感極まった老人は、実に気  
前よく当時持ちビルのひとつであったこの建物を布教の拠点として  
使ってほしいと修験者子雄に譲ったのだそうだ。

まるでわらしべ長者のような話であり、巷間では半ば都市伝説の  
ように語られている話だが、まぎれもない事実である。

日比野子雄。

見た目三十代中頃の男。

修験道で己を磨いたような装いをしているものの、実際はまるで本人には関係なく、修験の開祖が誰であるのかも知らない。それどころか仏舍利と聞いてロシアの大統領かと思ってしまうくらいに無信心者でもある。そしてそれを本人は別段隠してはいない。

なぜなら長寿教の根本義はまず信じることである。

そして、何かを信じるには先ず、良き雰囲気がなくはならないという彼の理屈に則った、要するに修験者のスタイルはその一環なのだ。

であるから、本尊といわれ崇められている金の仏像にも、浄土香と名付けられた御香にも、本来的になんの由緒も由来もない。平たくいえばお金さえあれば誰でも買える代物である。しかしそれでご利益がないかといえればそんなことはなく、実際新興宗教長寿教は連日大盛況だ。

そして、ここに集う老人たちは一樣に子雄に感謝している。

ちなみに丸薬は、五粒で都心のワンルームの家賃ひと月分ほどの値段。それでも飛ぶように売れる。特別な薬品を使っているわけではない。成分のほとんどが植物由来のものようだ。それが効く。中には先の老人同様医者も見放した病が癒えたという者もいるほどだ。

結果日比野子雄は、一代で巨万の富を得た稀代の傑物として周囲から羨望の眼差しを受けるまでになった。

実際の彼はただの山師であり、決して聖人などではない。

清濁両端併せ持ったどこにでもいる女装が趣味の男なのだ。お陰で最近彼の自宅のクローゼットには高級ブランドの化粧品だの香水だのが増えている。

しかし昇り続ける陽はなく、順風満帆だった彼の生活にも蹉跌は訪れた。

不思議な迫力のある大柄な男だった。

四角い顔に黒の総髪。つむじのあたりで束ねた髪が何とも古風で、格好もまた古式床しい感じだった。取り巻きを数人引連れてホールに入ってきた時、子雄はまず別室に通すべきかどうかを考えた。石動の周囲にはまんべんなく気を配っていたつもりであったが、どこか漏れがあつたかと思つたのだ。

しかし男は別段なにをするわけでもなく、子雄の話を聞くでもなく、本尊を拝むでもなく、もちろん丸薬を購入するでもなくホールを出て行った。

なにより不可解だったのは立ち去る男に数人信者がついて行つてしまつたことだ。理由はわからない。知り合いのようでもなかつたし、男がなにか言葉を発したわけでもない。

なんなのだろう。場も若干ざわついている。

子雄は酷く興が殺がれてしまい、その日の講義は早々に切り上げてしまつたほどだ。

軽くではあるが動悸も高まつていた。ちなみに女装癖こそあるものの、子雄は男色ではない。むしろ酷く女好きだ。

ともかく、男の不思議な存在感は存外糸を引き、結局子雄はその晩楽しみにしていたフランス製の高級下着を着用することなく、いだけ酒を呷つて眠りに就いた。

翌日も男はやってきた。

そしてまた無言のまま信者数名を引き連れ立ち去つた。

翌々日もまた。

子雄は流石に警戒し、普段から右腕として使っている女に命じ男の後を尾行させた。

女は戻つてこなかつた。

男が来るたび、子雄の心臓の高鳴りが増していく。理解不能な反応だったが、それに抗う気力はわいてこない。

そして何日目か。

子雄の右腕であつた女を自らの取り巻きに取り込んだ大男は口をあまり開けない独特の発声法で、石川アクシロウであると名乗つた。

そして石川は、実にいい場所だ。君が一から作り上げたのだな、気に入ったと子雄の目を見て、子雄の作った団体を褒めた。

その時子雄は無意識にも落涙したものだ。

耳に届く声のなんと胸躍らせることか。

なんと魂を揺さぶる眼差しをしているものか。

ほんと、実に軽く石川は子雄の肩を叩いた。

子雄は膝から落ちた。

「どうだろう。君の作出したこの場所、愚拙に譲ってくれまいか」  
子雄はすでに地べたに額をこすりつけ、肩を震わせ嗚咽を漏らしていた。

何故そんな行動をとったのか。

それは当の本人にもわからない。

こうして、日比野子雄は無一文となり、それでもとても幸福な心持ちで日々石川に仕えている。

石川はどうも、少し手間のかかる計画を抱えているらしかった。

\*

この世の不思議なことは私が是非とも被いましょう。

このところ公共施設に書かれたそんな文句を散見する。被いましょうと書いてあるわりに連絡先等は付記されていなく、つまりは落書きなのだ。こんなもの端から真剣に頼ろうという者などおるまい。しかし被うとあるから、それを見た者は少し非日常な印象を受ける。

たとえば公園の公衆便所。和式の便器で窮屈な姿勢で気張っている時目に入る文字。しかも油性ペンではなく、毛筆である。

この世の不思議なことは私が是非とも被いましょう。  
貴方は不可思議な出来事にお悩みではありませんか？

仕事を辞めて一年近くなるだろうか。

短期アルバイトを様々渡り歩きながら糊口を凌いでいる。

餌場木公平は煙草を吸おうと腰かけたベンチの隅に達筆なその文言を発見し、鼻で笑った。

「なんだこりゃ」

被うと聞いて、まず公平が頭に思い描いたのは幼いころ見たアメリカの映画だ。確かあれはキリスト教の神父だったか。

公平は自分のことを、そうした、いわゆる超常現象的な事例を頭から信じるほうではないと思っている。しかしその一方で強硬な姿勢で否定することもない。実際どっちでもいいというのが近いだろうか。理性的たらんことを常に心がけている公平としては、自分は超常とは冷静に距離を置いていると認識している。

この世には人間以上に恐ろしいものはないなどと年配の者から聞く人生訓のようだが、公平はそれは真実だと心得ている。公平自身まだまだ年若いのだが、それなりの人生経験を積んできていると思っ込んでいるからだ。

ただ、その頑なな思い込みこそが人生の先達に鼻で笑われるの最たるものだと気付くのに、彼はもう少しの人生経験が必要だろう。

「こんなもん。嘘くせえし」

そう呟きながらも気にしているのは、最近彼の身の回りでどうにも薄気味の悪い、実に厭なことが起こっているからだった。

家具らしい家具のない、寝具とテレビだけの簡素な部屋に公平は住んでいる。

家賃は安い。

どうせ寝に帰るだけだからと値段以外は特別注意を払わずに契約した、鉄筋コンクリートの二階建てアパートである。

ちなみに公平の部屋は二階の二五号室。階段を上って右に折れたどん詰まりの位置だ。

異変の兆候はすぐに現われた。

引越したその日の夜。

手伝いに来てくれた友人たちが帰り、くたびれ果てて床にもぐりこんだ深更。

外でボールの跳ねる音がする。

こんな時間に何してやがると、公平は携帯電話を見た。午前零時十四分。

音は断続的に続き、不意に消えた。それだけ一度きりならば朝起きれば忘れていくほどの瑣末な出来事で、実際公平は翌深夜までその出来事をすっかり忘れていた。

それを再び思い出した理由は他でもない。またボールの音が聞こえてきたのだ。時間も昨夜と似たり寄ったりであった。しかしその時点でもまだ公平は、サッカーなら嫌いじゃないけどなど、その程度のことしか考えていなかった。

と。

不図思った。

サッカーボールにしては若干音が軽いのではないか。

バスケットボールでもない。

バレーボール…いや、子供の頃に遊んだドッチボールのような。

…ゴム毬とか。

ゴム毬？

こんな夜中に？

どうでもいいことだと思いつつながら、公平は半身を起こし、カーテ

ンの端を捲った。

部屋の真ん前にあるアパートの駐車スペースは半分も埋まっておらず、日中はそれこそボール遊びに興じる近所の子供たちの喚声が絶えない。

アスファルトの上、薄れた白線を緩い光で照らす外灯。

誰もいない。

音も消えていた。

少しだけ気味が悪い。

音といっても騒音というほどではなく、意識しなければ無音に等しい。

実害はこれっぱかりもない。それなのに。

その翌日もまた。

しかしその夜は、公平はしたたかに酔っていた。久しぶりに会った学生時代の友人のおごりに気を大きくし、足取りも怪しくなるほどに酒を飲んだのだ。

アパートに戻りシャワーを浴び、寝床の上で一服点けた、その時だ。

ぼん、ぼん、ぼん。

聞こえる。

さすがに三度目ともなれば幾分馴れが生じるのか、それとも酒気が気を大きくしたのか、真つ暗な部屋に見るつもりのない通販番組を映しつつ公平は煙とともにこういった。

「はは、またはじまったな。オイ一緒に遊ぶか？」

音がやんだ。

翌日。

駅前でのティッシュ配りのバイトを終え、公平は普段と同じくオレンジ色のコンビニで煙草と弁当とアイスを買って帰宅した。

ゴム毬の話はメールなどで数人にしていたが、特にこれといったリアクションはない。

それもそうだろうと発信者の公平も思う。

なんとなく薄気味が悪い程度の話では、話を振られたほうも返答に困るといふものだ。しかしそれが公平にはつまらない。そしてそんな、他人から注目されたがる自己偏愛の強い自分の性格を公平は把握していない。

「ありきたりのじゃなくつてさ、濃いイの来いって」

夜。

三度ボールの音が聞こえた時間帯に、公平は目を覚ました。

暗くなくては寝られぬ公平は真つ暗な室内で耳を澄ませた。しかしその日に限って待てど暮らせどボールの音は聞こえない。

いや。

ボールの音はしないが。

なにか固いものを叩く音が、かすかに聞こえる。

遠くの方で、かんかん、と。

鉄と固い物がぶつかるような音。

かんかん、かんかんかん。

ノック、だろうか。

大方どこかの部屋の亭主が夜半に帰宅して女房に締め出しを喰らっているのだろう。

深夜にゴム毬が弾む音は確かに不可解だが、かといってそれとこれとをごっちゃにはしてはいけない。自分は冷静で理性的な男なのだからと、公平は枕もとの煙草に手を伸ばした。

オイルライターの蓋を開け、灯す。

一瞬自分の部屋が朦朧と浮かび上がった。その時に周囲の様子を具に目で見回したのはご愛敬というものか。

かん、かん。

遠くにノックの音はまだ聞こえる。

しかしゴム毬の音は聞こえない。

「ぶん」

公平は煙草をもみ消して、再び眠りに就いた。

そんな日がそれから四日続いた。  
なんとなくであるがノックの音が近づいて来ているようにも思う。  
しかしそれは気のせいだと、公平は無根拠に思っている。

そして。

毬突きの音が聞こえなくなって六日目の深夜。

いつもの夜よりはつきりとノックの音が聞こえてきた。

かんかん、かんかんかん…

音の感じが昨夜まで聞こえていたのと違う。随分とはっきりしている。

どうやら同階、か。

昨晩までは何者かは下の階を軒並みノックしていたようだ。

公平は寢床の上で胡坐を掻き、少しでも落着きをなくす。

とりあえず考えてみる。どうしてこう、毎夜毎夜ノックの音がするのだろうか。

一箇所、特定のひと部屋で連夜聞こえているのならわかるが、明らかに音は移動している。

昨夜までは確かに一階で聞こえていた。

しかし今日は違う。

自分の部屋のある二階でその音が、

かんかんかん。

する。

ただ、ゴム毬の音と同様取り立てて実害はない。音の大きさとしてそれほど気になるものでもない。要するに気にするかしらないかの問題だろう。

かん、かんかん。

放っておけば自然と止むのだ。

誰かが扉の向こうの誰かに何かしらの用事があつて為す行為。音が止んだというのは要求が叶ったということだろう。

ドアの開く音は聞こえたことはないが。

つらつらとそんなことを考えているうちノックの音はやみ、いつの間にか公平も再び眠りに落ちていた。

「ここもちがーう」

だからそんな子供の声も、公平には聞こえていない。

翌朝。

公平は実に不快になった。

アルバイトに出かける前に、自分の暮らす二階部分と、その真下の階一階部分の廊下を歩いてみたのだ。

戸数十戸。

埋まっていたのは、公平の部屋を含めて三軒。

それではあの、連夜のノックはいったい誰が何の目的で行っていたというのか。

一番簡単な理由づけは、いたずらである。

時間が時間であるから、酔っ払いあたりが想定できよう。

しかし、仮にそうであったとしても。

毎夜毎夜深夜。

夜。

公平は起きていた。

部屋は明るい。

煙草も、続けて何本も火を点けては二口ほど吸い、消し、また点けるを繰り返している。

かんかん、

聞こえてくるノックの音。

そして案の定。

「近くなってる…マジかよ…」

公平の二の腕が粟立った。

「畜生。なんだってんだ畜生」

公平は矢庭に立ち上がりドアに向かって走る。

あれほど実害はないんだとおのれにいい聞かせてきたにもかかわらず、公平の狭量な器ではもう限界だった。

勢いドアを開け、廊下に。

誰もいない。

蛍光灯の明かりに照らされた、白化したコンクリートばかりが矢鱈に目につく。

公平は実にゆっくりと肩の力を抜いた。

確実に音が近くなっている。

いずれあの音は自分のところにもくるのだろうか。

しかし、何故。

隣を見ると、アルミ製の格子越しの曇り窓から明かりが漏れている。そこから聞こえる食器を洗う音に、公平はとても救われる思いがした。

隣室には住人がいる。少なくともこのままいけば、自分の部屋に何者かがやってくる前に隣室を挟むはずだ。それで何かかわるかも知れない。いたずらならそれでいい。変質的な何者かであったとしても、面倒事は自分の前の顔も知らぬ隣人で止まる、はずだ。

公平は部屋に戻り、また煙草に火を点けた。

そしてそれを待っていたかのように再び、

かん、  
かん、かんかんかん…

順序通りに来ているのなら音は二 三号室。

そして昨晚。

ついにノックは隣室を訪れた。

公平はその瞬間をドアに貼り付き固唾を飲んで待っていた。  
はたして隣人は（どうやら若い夫婦のようだ）いったいどうする  
のだろうか。

かんかんかん。

……。

かんかん、かんかん。

…どなたですか？

沈黙ややあつてドアを開ける音。

…どこの子？ こんな時間にどうしたの？

子？ 子供？

…お母さんは？

子供がこんな時間に延々ノックして回っていたというのか？

…ボクお母さんは？

……。

…え？ なに？ なんていったの？

「いねえツつってんだろ！」

突然の野太い怒号に公平は腰を抜かすほど驚いた。とてもではないが、子供の声には聞こえなかった。しかしさすがに恐怖が勝り、公平は動くことができない。

酷い静寂。

まんじりともしない時間は遅々と過ぎ、カーテンの向こうが白みはじめてきた。隣室はどうなったのだろうか。確かめたくとも未だ動けずにいる。しかし、このままだと明夜、あの恐ろしい声の主がこの部屋を訪れるのだ。

怖い。

公平は急な息苦しさを感じて、外の空気を吸おうとカーテンを開け

窓にはべたべたとたくさんの子供の手の跡が

「うわあああああああっ！」

今晚…

「今晚おそらく」

公平の目の前に座す山伏のごとき男は、長い顔を右に左に傾けて薄い笑顔で聞いている。

「今晚おそらくそのノックが自分の家に」

「やってくるよ」

「はい」

結局餌場木公平にはこのような状況の時頼る場所が思いつかなかった。

親兄弟は近在にはおらぬし、友人にはみつともなくて泣きつけぬ。しかしそれでも、いくら巷で評判だからといって奇跡の健康を売りしている宗教団体の無料相談会に顔を出してどうにかなるものでもないと思う。

つまりは公平は混乱していた。

公平の目の前の日比野子雄と名乗った行者風の男は、なんとも面妖です。ねと、場違いな相談者の対応に若干苦慮している様子だ。

「ええと、エバキさん。あなた再三いつてましたが、実害は今のところないのでしょう?」

「それは、まあ」

怖いからどうにか欲しい。公平の望みはそれだけだ。

隣室のドアにも、公平の部屋同様子供の手跡が無数に付着していた。

安っぽい電子音が立て続けに三回鳴った。

どうやら無料相談の制限時間が訪れた様子。

日比野は薄い苦笑いをして、

「もし何かありましたら、またここへ来て下さい」

とだけいって、やんわりと公平を室外へと誘導した。結局具体的な解決策は一切提案されなのまま。しかしそれは仕方ない。ここはそうした場所ではないのだ。

廊下に出た公平の目に、所狭しと居並ぶ年老いた相談者たちの姿が入ってきた。

なんだかとても厭な気分になる。

どうしてこんな生き意地の汚い連中に邪魔されるのだと本気で思

う。軽く睨みつけるが、老人のひとりに見返されると、公平はさすがと宗教ビルを後にした。

外は暑かった。

今日は漫画喫茶で夜明かしでもするかと、そう思っている。

なんて俺は不幸なんだ、と公平は頭を抱えた。

肩を叩かれた。

「この世の不思議なことは私が是非とも被いましょう」  
振り向くとそこには菩薩顔の男が立っていた。

私はその時、石畳で無為な時間を過ごしていた。

一応営業はしているものの所詮いわくつきの店、開店休業状態は毎度のことであるようだ。

ただ、私の雇い主は泰然としている。

特にお金に不自由していないのか、もともと儲けるつもりはないらしい。というより、客がいない方がいいのではないかといった印象を受ける。いったいどういった腹積もりで営業しているものか。尋ねたところで明快な答えが返ってくるようにも思えないので、私はそのへんのは早々に諦めてしまっていた。

結局は捨て難いもの。執着の為せる業か。

そうはなりたくないものだ、私は頬杖にくわえ煙草で新聞を読む店主を盗み見た。

やっぱり見えてんじゃん？

両目がないのは紛れもない事実だが、そう思う。

読んでいるのも点字新聞ではないようだ。また仮に点字新聞だとしても、紙面を指でなぞらなくては情報は読み取れないはずで、リヨウにそのような動きは見られない。

ただ、どうにもそうしたことはここではとても些細なことであるようだ。

そして、見えるとか見えないとか生きているとか死んでいるとか、事の大小にかかわらず曖昧な空間は、今の私には少し居心地がいいやれやれだ。

後ろ向きだ。

現実逃避だ。

ほとんど何も知らないリヨウに対して過去の影を見るのも、ただの幻影だ。

そんなことはわかっている。

わかっただけで、もう少しだけ現実から目を背けていたい。

「ねえ、なんかすることない？」

リヨウはふう、と細長い煙を吐き出して、ねえなと短く返答した。

「皿とかコップとか洗おうか？ て、洗う物もないか」

店内には相変わらずごく小さな音量で曲が掛っていた。どうやらそれはリヨウの趣味というわけではなく、この店の前店主が置いたままにしていった物らしい。

私には珍しい、レコード盤。

私はなんとか会話を続けようと話題を探す。

「この曲なんていつたっけ？」

さあと矢張り短い返答。

「さあ。知らないで掛けてるの？」

「知らなくても耳がありゃ聴ける」

「それはそうだけども。もう少し、なんていうかな。…会話しよう

よ」

私のそんなぼやきに、リヨウは両の鼻の穴から盛大に煙を出し、

「友達ンとこ行け」

極めて素気ない。

しかしそれはしようがない。

「それができるならとくにそうしてるし」

自分で話を振っておいて、私も何をかいわんやである。しかし、筋の通らないことをいっているのは重々承知で、それでも今いる空間を少しでもましなものにしたいと願うのは決して間違いではないと思う。

リヨウがため息をつきそうな顔をしていたので、先に大きなため息をついてやった。

「だってお客こないし。暇だよ」

といつてもここは一応酒を飲む店だ。

小柄で色白、赤い頬をした私などがいては来た客は少し驚くことだろう。いっそのことメイドみたいな恰好してやるうか。いや、さすがにそこまでやるとリヨウに追い出されるか。

それだけは避けねばなるまい。

私はリヨウに興味がある。あの人と似てる似てないは別として、リヨウの為にしてきたことに興味がある。

真偽の別は今考えない。

とにかく私にはまだ、現実逃避が必要なのだ。

曰く、逃げるな。そんな言葉は私には届かない。

前を見る。

下を向くな。

振り返るな。

目を背けるな。

全部糞喰らえ。

人ひとり生きていくのに、いったいどれくらいのパワーがいると思ってる。

常に前向きでいるということはそんな貴重な力を発散し続けるということではないか。

自分の殻に閉じこもる時間が必要な人間もこの世には存外多いということを知ってほしい。

倒されてから再び立ち上がるのに掛かる時間は、ひとりひとり違う。その時間を見守っていてほしいなどと甘えたことはいわない。

ただ、放っておいてほしいだけだ。

私はリヨウの横顔を見た。

リヨウは空ろの両目を中空に漂わせ、時折ぶつぶつと独り言をいっていた。

「リヨウ。あの。ここで自殺したっていう」

「好きだなその話」

「好きっていうか、何度聞いても詳しく話してくれないから」  
「知ってることは全部話したつもりだ」

リヨウは過去、自ら命を絶った女性を復活させた。  
その女性の自殺があった当時、死んだ女がうろろろしていたあの、  
テレビに映ったあの、妙な噂が立っていたのは事実で、当時高校生  
だった私も冗談半分て耳にして楽しんでいた。

リヨウにいわせると、その噂のあった頃その女が死んでいたのは  
事実であり、そして死んだ後に動き回っていたというのも、冗談で  
はなく事実であるそうだ。

ただし、その出来事が生き返り云々とイコールであるかどうかは  
明言しない。

死んで後再び動くことは、厳密にいうと生き返ったわけではない  
というのだ。

その理屈は、まあわかる。

そして今の私には、死んだ人間と今一度コミュニケーションをは  
かれるようになる（かも知れぬ）というだけで十分だった。

冷静な分析も、科学的な検証も一切要らない。

嘘でもいい、作り話でも何でもかまわない。

所詮現実逃避なのだから。

ただ、大雑把な妄想よりは、細部まで作り込んだ作り話のほうが  
逃避するにもうまくいくというだけだ。そしてリヨウの話は、（リ  
ヨウ本人の語り口調がざっくりしてはいもの）それなりに私の痛  
みを和らげる一助になっている。

結局のところ、私がこんな場所にいる理由はそれだろう。

…けど。

本当に生き返るのなら全人生捧げるのも悪くない。

気づくとリヨウは料理をしていた。

料理といつてもどうせインスタントラーメンに刻みネギを入れただけのものだが、不思議と私を作るよりおいしい。どうしてだろう。見えないのに案外小器用になんでもこなす。

そしてリヨウはいつも、尋ねもせず私に分まで作る。

「なんか手伝う？」

「間に合ってる」

「でも、手、切ってるよ」

リヨウの左手に赤い血が滲んでいた。

リヨウは洗い流しもせず、じつと傷口を見つめ、

「これぐらいの傷、昔はすぐに塞がったんだがな」といった。

「え？　なんか病気の話？」

その問いに、応えはなかった。

携帯電話が鳴った。

母からだった。

金切り声で今どこにいると喚いている。曖昧に説明するも、どうやらまるで耳に入っていないようだった。

夜になっても帰らないくらいでそんなにパニックにならないでよとぼやくようにいうと、電話は父に変わった。

「…え？」

血の気がひくというのは本当にあるのだな。

血の気がひいて、眼球から血が失せて、視神経が機能低下して、だから目の前が真っ暗に

「…お姉ちゃんが殺されたって、何いつてるの!？」

私はありったけの声を上げて、電話に怒鳴った。

切れ切れに、いつもは必要以上に冷静な父の、息切れだらけの言

葉が耳に届く。

…警察…

…首…

…腹…

…失血…

…男…

…キャバクラ…

「…誰に…」

私の問いに、父はまず質問をしてきた。

蜜はお姉ちゃんが水商売をしていたのを知っていたのか？

私は知っていた。知っていたが何だかとても怖くなって言葉を濁した。

「キャバの客に殺されたの？ ねえ？ そうなの、パパ！」

電話の向こうで父は、苦悶に満ちた嘆息を漏らした。

混乱は増すばかりで、とにかく私は電話の向こうの父に質問を浴びせ続けた。

そのひとつひとつを丁寧に答えて後、父は短く早く来いといった。

私は素直にそれに従った。

リヨウからはひと声もなかった。

\*

駒場と名乗った菩薩顔の男は公平の部屋の窓際に立ち、ガラスに残った子供の手の跡を暫時眺めた後、

「深夜ゴム毬で遊んでいた子供が、今度は一軒一軒ノックして探して回っているのだね。ほかならぬ、」

貴方を、と公平を指差す。

公平は一瞬むっとするが、今や依るべきものは眼前の男しかいないのだ、露骨に厭な顔もできなかった。

矢鱈と骨格のしっかりした、筋肉質の男だ。開いているのか閉じているのかわからない目のせいか常に笑っているように見え、そのせいだろつか奇妙な安心感を与えてくれはする。

公平は何か飲みますかと訊いた後、自分は煙草に火を点けた。

駒場は柔らかい口調でお構いなくといい、尚も窓とそこから窺える外を凝視していた。

時刻は夜の十時。

実は公平は見たいテレビドラマがあったのだが、流石にテレビを点けるのは憚られた。とはいっても決して余裕があるわけではない。実際は今すぐにも逃げ出したかった。ただ、駒場の持つ妙な存在感に呑み込まれるように依頼をってしまった手前動けずにいるだけだ。

「どうして貴方なのです？ 何かそのお子と因縁でもお有りです？」

「インネンで。そんなの知らないですよ」

「まるで思い当たるところがない？」

「…いや、ううん。強いていうなら、毬突きをしてんのに気づいて何日目かな。俺、酔っ払ってて。よくは覚えてないですけど、遊んでやろうかとか何とかいったような気がします」

本当に思い当たる節はそれくらいしかない。そしてそれとて、原因を必死に考え、無理矢理ひねり出した話だ。そんな、お愛想のよくな一言でここまでの思いをしなくてはならないのなら、公平はきっとこの先一生言葉を発さなくなることだろう。

駒場は成程と行って、窓の棧に片手を掛けた。  
かなり身長が高い。

しかし物腰や表情が柔らかいせいかわ威圧的な印象はあまり受けなかった。

公平はかぶりを振った。

恐怖に慄く自分は常に中心に居座っていてそれはとても不快だ。  
俺はもつと揺るぎのない男なのだ、この期に及んで思おうとしている。本当の餌場木公平は、ただの不可解な音に戦々恐々としている小心な男だというのに。

「本当に助けてくれるんですね？」

無料で。

公平は窓際に佇む男の背に声を投げた。

駒場は振り向くことなく勿論といい、

「私は本物ですから」

と意味深長な言葉をつなげた。

それから二時間、小さな部屋で男二人は無言で過ごした。

公平が沈黙に苦痛を覚え、箱に残った最後の一本に火を点けようとしたその時

どん！

凄まじい音。

最早ノックなどではなく、丸太か何かで突き破ろうとしているよ  
うな

どん！

がたがたと家具が揺れる。

公平は下唇に煙草を貼り付けたまま、駒場を見た。

駒場は穏やかな相好を崩すことなく、懐から矢立を取り出した。さらさらと紙に何か書いている。

見ればそれは漢数字だった。

「餌場木さん」

「はい」

「鰯の頭も信心からなどというでしょう」

「は？」

駒場は漢数字で廿一と記した紙を公平に寄越し、

「これは気端の利くモノです、持っていて下さい」

なにをのんびりと珍妙なことをいつているのだ。

そうしている間にもドアからは怖ろしい音が響いている。

「がちゃ！ がちゃがちゃ！」

ドアノブを回す音。

怖ろしい。

公平は震える手で警察に連絡しようとする。

「何をなさっているのです」

「何をつて、警察呼ぶんですよ、こんな夜中にドアを開けようとしてる！」

「おやめになったほうがいい、恥を掻くだけです」

「恥？」

「恥？」

「確かに今、ドアから物音がしています。ですがそれも時が過ぐればその事実の有無もあやふやとなる。例えば」

公平の手に持った廿一番の紙が意思でもあるかのように動き出した。

公平は短い悲鳴を上げてそれを手放した。

「この事実。一夜明くれば眼前にした貴方ですら夢かうつつか区別がつかなくなるでしょう。それほどに怪異とは有りも無しも境の曖

味なるもの」

つかつかと駒場は玄関まで歩いて行き、

「見らず想像する故苛まれる！」

派手に鉄の扉を開け放った。

公平はぺたりとその場にへたり込み、ああと嘆息を漏らした。

「みーいっけ」

膝の皿が矢鱈に突き出た、ざんばら髪の子供。

短パンのポケットにはたくさん枯れ葉。

脇に黄色いゴム球を抱えている。

「何を怖れることがあります。ただの子供ですよ、餌場木さん」

「た、ただの子供がこんな時間にいるわけじゃないじゃないですか……」

しかし子供です。

まるで動じたところのない駒場は先と同じように紙に何かを書きながら子供に近寄ると、

「見たならば固定する。これは子供です。それ以外の何物でもない。

貴方のように幽霊であるとか、」

「幽霊だなんて、俺は一言も……」

「あまつさえ妖怪であるとか。それは妄想と切り捨てなされるがい。そんなモノはこの世に存在してはならない！」

その線引きをいつたいたいどこですればいい。そんな弱々しい公平の思いをよそに、駒場は更に子供に近寄った。

子供は、

「お前に用はない！」

怒鳴った。

昨晚と同じ声音だ。

駒場は変わらず動じない。  
薄い笑顔を湛えたままだ。

かさり。

枯れ葉が一枚落ちた。

よくよく見れば足も手も顔も血の固まったような黒い傷だらけだ。  
着ている衣服は泥だらけである。

そして公平は、現実からの逃避行動か余計なことに頭を使う。

もしや目の前の子供は虐待され、そして殺されたのではないか。

「そうだよ」

「ひ！」

目の前に子供の顔があった。目といわず鼻といわず口といわず、  
子供の顔中のあらゆる穴から土がこぼれ落ちている。

公平は仰け反る間もなく息だけが詰まった。

なんだこの現実!?

子供の手が伸びてくる。

その手の汚いこと。

爪の中は土で黒く、甲といわず平といわず煙草を押し付けたよう  
な火傷の痕が。水膨れが。

ああ不味い。

掴まれたら終わりだと、公平はそう思った。とその時、何かが公  
平と子供の間をすり抜けて行った。子供の注意がそちらに向けられ  
る。するとまたもうひとつ違う何かが現れ、子供の襟首を掴むとコ  
ンクリートの床に思い切り叩きつけた。

公平は思わず目を背けた。

恐る恐る目を開けると、床にはなにもなく、先ほど駒場が数字を記した紙が二枚落ちていているばかりだった。

「こゝ駒場さん、いったい何が」

そう問う公平はなにもしていないのに肩で息をしていた。

「貴方の悩みの種は消え去りました」

駒場はもう笑ってはいなかった。

ただ異常に伸びた背筋が、不健康を常としている公平にはとても異質なものに見えた。

「ど、どうやって…」

「貴方は悩みが取り払われた事実をこそ重視すれば良い」

「それは…でも、あの子供、」

虐待じゃないですかね、あれ。

それは何の証拠もない、公平の想像に過ぎない。

幽霊とか怨霊とか自縛霊だとか公平はそうした区分をあまりよく知らないが、もし仮にあの子供が殺されていて、何かを訴えたくて現われていたのだとしたら、

「親か誰かはわからないけど。虐待されて殺されて、それで山にでも埋められたんじゃない？」

そんなことを真剣に話す自分も公平には信じられない。

しかし、目の前に子供の死体が転がっているでもなく、目に見えていたはずの泥も枯れ葉も何も無い。

駒場は床に落ちた紙二枚を拾い上げ、

「何を拾い、何を捨てるか、それは貴方次第」といった。

公平は言葉の意味がわからないことを眉間の皺で示した。

「大切なのはあったかどうかも曖昧な出来事ではなく、今後の貴方自身に必要なものがなんであるのかということ。その、虐待云々の子供の話が、はたして今後の貴方に真実必要であるのか。選ぶのは貴方です」

「そ…それはそうだけど。でも、駒場さん、あの子供もしかすると可哀そうな子供なんじゃ」

「それはまた別な話」

「別？」

「私には私の役目が有り、この世の存在理由が有りましょう。以上を求めれば無理が生じ、以下に安んじれば不要となる。私はただ消す者です。仮にあのお子が本当に虐待を受けていたのであれば、それをどうかするのはそれこそ警察の役目でありましょう。私が手を出す問題ではない」

「そ…」

そうなのかも知れず、違うようにも思える。

正直公平の混乱は頂点を突き抜けていて、一切まとまった思考が結ばずにいた。

とにかく不格好な礼を駒場にして、公平は斜めになりながら部屋に戻った。

本当にこれで良かったのだろうか。

あの子供は誰かに助けを求めていたのではないだろうか。

それを駒場はなんの躊躇もなく消し去ってしまった。妙な技を使つて。

公平は駒場に縋った自分の存在を忘れ、軽い憤りを覚えている。無責任で自分勝手な思いだが、眼差しだけはやけに真摯だ。

ゴム女というのが一部で話題になっている。

一部といつてもどのあたりの一部分なのかは判然とせず、つまりは噂の域を出ない話ということだが。

なんでもそのゴム女、その名の示す通り顔を含めた全身を黒いゴム素材の衣服で包みこんでいるらしく、特別自分は何某であると名乗らないため便宜上ついた、いわば通り名であるようだ。

ゴム女はあるビルの地下テナントで占いの真似事をしている。見料は初回千円、以降五百円と格安で、その上案外願いが叶うと評判らしい。

案外、とはまた微妙ないいまわしだが。

その噂の店を訪れた者曰く、地下の室内は薄暗く、ゴム女の内容は匂いと音で知れるとのこと。その闇の中客は椅子に座り、願い事や悩み事をいう。それだけだ。その後どうなるのか、そのあたりのことはどうにも曖昧である。

結局憶測こそ様々に飛び交っているが、もとを質せば友達の友達がといったていの話。実際は誰もゴム女の託宣を目の前で聞いた者などおらぬ。

そして噂とはそうしたものである。

しかし、そんな噂話に悲壮な思いを抱えて絶る者もいる。

おのれの持つている様々な力をありつたけ駆使し、それでも尚事態の好転が見られない時、疲れ果てた人はきつとその霞のようなその女の存在を求めるものと思われる。

その所在はほとんど明らかになっていないというのに。

娘を信じ難き形で失った男、アマインノリカズ雨居憲和は万策尽き果て、精も根も使い果たして、それでも一切眠ることもできず、且つまた心安らぐこともない日々を送っていた。

職を辞し、精神に異常を来した妻を病院に預けて、今日も夜の町を当てもなく徘徊し続ける。噂の女を求めて。

それほど大きくない町とはいえ、この石動にも地階にテナントを有しているビルなどごまんとある。今の彼にできるのはそのひとつひとつを風潰しに当たっていくことだけだ。

裏の世界の横のつながりを少しでも知っていれば、比較的早い段階で彼の求めているものは見つけられたかもしれない。しかし、雨居の人生は真つ当過ぎた。今までずっと陽の当たる道しか歩んでこなかった。

明るい光の下年老いていくのだと、なんの疑いもなく今まで生きてきた。花の咲かぬ場所などないと半ば本気で信じてもいた。

汗みどろの額を袖口で拭い、もう何度目かもわからぬため息を落とす。

シャツも背広もよれよれである。

家に帰ってもそのままソファに横になるだけで風呂にもここ何日か入っていない。しかし今はそれでいいと思っている。身を引き裂かれるような苦痛を少しでも忘れるには、今はすべてを擲って何かに気を奪われているほうが。

雨居の愛娘は殺害された。

刃物で全身めった刺し。

警察病院に到着し、一応確認のためにと通された部屋のベッドに横たわった長女の顔には、鼻と、片眼と、そして舌の先がなかった。きい、と妻はひと声叫んでどこかへ走り去り、遅れてやってきた次女は変わり果てた姉の姿を一目見て気を失ってしまった。その時雨居がその場に立っていられたのは、父親である自分が人事不省に陥るということはあってはならないと、それだけのもので気を留めておくことができ、しかし一方で自分も妻や次女のように振る舞えたらいつそ楽だろうにとも思っていた。

猟奇殺人事件として警察の捜査は大々的に行われた。

捜査がはじまってすぐ、どうも長女はストーカーに悩まされていたことが判明した。

雨居は次々に明らかになる事実に驚いて見せた。

長女は隣県の盛り場のキャバクラで働いていた。ストーカーとはその店に数回訪れていた客のようだ。

警察はそのストーカーを重要参考人として搜索したが、その行方は杳として知れなかった。

雨居は父としての自身が揺らいでいた。

父娘関係は非常にうまくいっていると、勝手に思い込んでいた。

すべて幻想だった。

良き父。それはどうやら雨居ひとりの思い込みだったようだ。

「違う」

いや、世間の親子関係にも秘密などいくらでもある。そう思い込もうとするのは卑怯だろうか。

どうして。どうしてと、思う。

自分にしても長女にしても、特別悪いことなどしていないではないか。因果律がどうのと曖昧なことをいうつもりは毛頭ないが、これではあまりにも…。

娘はなんと不幸な子だろうか。

もし仮に、殺人者が初犯であるとするなら、仮に改悛の情が見られるとしたなら、娘を惨殺した鬼畜はいったいどれだけの罰を受けるといふのだろうか。

目を追うごとに雨居の思考は偏向していく。

警察が捕まえる前に自分の手で。

殺さねばならない。法の裁きなどに委ねてしまっってはならない。

雨居は強くそう思う。

だから雨居は夜の町をさまよっていた。

ゴム女を探して。

ゴム女を見つけ出し、真偽はどうでも、その力でなんとか犯人を見つけ出させるのだ。

先生と呼ばれる仕事を退職し、徒手空拳となった五十路の男にできることといえばそれくらいだった。結局自分など肩書きがなくなれば何の力もない。いや、それも世間皆同じだろうか。雨居には最早わからなくなっている。

ごりごりと脳味噌の軋む音がする。それでも頭は妙に冴えていた。だからここ最近雨居は外界の音がよく聞こえる。世の中の者たちはこんなにも声を出していたのかと驚くくらいだ。

しかし時には余計な声も混じって聞こえる。

全部投げ出してしまいなよ楽になろうよ

そんな声は幻聴だ。それぐらいは疲弊しきった雨居にもわかる。その声はきつと自分の弱い部分から漏れ聞こえる、本当は弱い弱い自分の声だ。

捕まえて、殺すんだ

殺せ

殺せ

「いわれるまでもない！」

思わず雨居は大声で怒鳴っていた。

汚物でも見るような顔で振り返った奴らを、雨居は藪睨みに見返した。

意思は強いほうである。しかし背中を焼かれるがごとき苦痛は徐々に雨居の精神を蝕んでいった。

ゴム女を探しはじめて一週間目、ついに雨居は噂の人物にたどり着くことができた。

雨宿りをした花屋の軒先から見えた、地下への入り口。

最早情性でふらふらと歩み寄り、コンクリートの階段を下りていくと、まるでボイラー室のような無味乾燥な扉があった。雨居はこれでも情性でなにも考えることなくドアを開けた。

室内もやはりボイラー室のようだった。

天井からぶら下がるいくつかの照明。明度はあまりなく遍く見渡すことはできないが、どうやら普通ではない雰囲気を感じていることだけは疲弊しきった中年男にも理解できた。

雨居は無性に煙草が吸いたくなり、ごそごとポケットをまさぐると、ぐしゃぐしゃに潰れたマイルドセブンのソフトケースが出てきた。しかし生憎火が切れていた。

どこかから足元を震わせるような振動音が響いている。

「ご予約の方ですか？」

突然後ろからその声を投げられ、雨居は不覚にも引き付けを起しそうなほど驚いた。

振り向くと今風の長髪に顎鬚を蓄えた、蛇のような男が立っていた。

男は雨居の目をじっと見たままゆっくりと黙礼した。

雨居も怖ず怖ずと会釈する。

「あの……」

「ご予約は？」

「いえ、あの、そうしたもの……」

「それではどなたかからのご紹介で？」

蛇男は高くも低くもない、男か女かわからぬ声音で雨居に尋ねる。

黒目が小さい。

「紹介……」

雨居は言葉に詰まる。しかしながら元来聡い人間である。とある、占いに目のない政治家の顔が瞬時に浮かび上がった。

ここまで来てただで帰れるか。

「腰川先生から紹介されまして」

名刺も持っている。雨居は透かさず懐から名刺入れを取り出し、

かなりもたもたと端の折れた一枚の名刺を取り出して見せた。

男は、そうですか腰川先生のご紹介ですかとちらりと雨居の肩越しの向こうに目をやった。

それから雨居の目をじつと見る。

雨居は何故か目が逸らせない。

それから男二人は向き合ったまままんじりともせず、徒に時間だけが流れていった。

さすがに業を煮やした雨居は、相手の情に訴えようと言葉を替えてみた。

「あ…あの…先日私はむ…娘をコロ」

ぴたり、と手のひらを差し出して男は雨居の言葉を止めた。

「ああ、申し遅れました。わたくし端神と申します」

「はあ、ハシガミさん。あ、雨居です」

端神はやや上を見てなにやら思索を重ね、

「もしかすると、先日娘さんを亡くされた？」

雨居は返事をするかわりに酷く深く頷いた。

「それでしたら一も二もなくお通しします、どうぞ」

端神はするりと雨居の横を抜け、迷路のごとき地下室をぐるぐる  
と先導しだした。雨居は無言で従うのみだ。

呼吸が苦しい。

目の端がちかちかする。

米噛みが熱い。

吐き気が…

「こちらです」

端神が指示したのは、入口よりも更に貧相なドアだった。

「どうぞ」

闇だ。

部屋の真ん中に蝋燭が一本灯っている。

「そちらにお掛けになってお待ちください」

端神はそういつとドアを閉め、足音もなく立ち去っていった。

そちらも何もこう暗くてはどこになにがあるのかさっぱりわからない。雨居は手探りでどうにか椅子らしき物を見つけ、倒れるように座った。

ぜいぜいと暗闇に自分の荒い呼吸だけが響く。

どれくらい待っただろう、軽い達成感にいくらかの満足を得、雨居が久方振りにまどろんでいると、どこから乾いた靴音が聞こえてきた。

ぎゅうぎゅうと耳慣れぬ音も混じっている。

音はまるで反響していて、いったいどこから聞こえてくるものか。雨居は何故だかとても慌てて、それは忙しなく周囲を見回した。

しかし彼の霞んだまなこには闇色しか見えなかった。

こつこつこつ、

ぎゅうぎゅう。

靴音はわかるとして、合間に聞こえる音はなんなのだろう。望みの一段目が叶ったというのに雨居はそんな瑣末なことを酷く気にした。

「アマイノリカズさんですね」

突然名を呼ばれ、雨居は返事に詰まった。

気づけば闇と同色の黒い女が真ん前に立っていた。

「は…はい」

「そう緊張なさらずに。本日はようこそいらっしゃいました」

口調は丁寧だが声音は鞭のようになやかである。ただ矢鱈にこもった声ではあった。

雨居は固唾を呑んだ。

「あの」

「わかっております」

そういつて、どうやら女は腰かけた。

雨居の鼻腔にゴム特有のなんともいえぬ匂いが届いた。

「娘さんを殺した犯人の行方を知りたい」

「はい、その通りです」

すっかり場の雰囲気と女の奇妙さに吞まれてしまっている雨居は、最早返事をするのも危ういほど不安定だ。

そんな雨居を知ってか知らずか、女は矢張りこもった声で続けた。  
「娘さんを殺した者」

口を何かで覆っているのだろうか。

雨居は返事をするかわりに大袈裟に頷いて見せた。はたして女に見えたものか。

しかし女は端から何もかもお見通しといったていで、

「殺した者を捜すのに必要なものがあります。今日は持参されましたか？」

と尋ねてきた。

「は…あ、いや。必要なもの、ですか？」

「ワタクシは、他人の人生にほんの少しだけ瑕をつくることのできるのです」

「…あの、仰っている意味がわかりません」

「そうですね、残念です」

そういつて女は黙った。

どこかから水滴が落ちている。

ぎゅう、とゴムが鳴った。どうやら女が脚を組み替えたようだ。

「あの…それで」

「疵をつけたい相手。雨居さんであるならば、犯人ですね。その、犯人の私物なり体の一部なりなんでもいいのです。とにかく対象と関わりのあるものがあれば」

「それは知りませんでした…」

当然雨居は何も持ってきていない。その前に犯人の目星すら付いていないから苦勞してこの場にいる。

「娘に付き纏っていたというストーリーカーが犯人ではないんですか？」

「さあ。ワタクシにはわかりかねます」

「だってアナタ、占えるんでしょう？」

「占いなど一切しません」

所詮は噂。雨居は暗闇の中で更に暗い世界へと落ち込んでいくような気持ちになる。

ゴム女は薄く笑った。スキューバダイビングをするときに装着するレギュレーターをはめているような声だ。

それにしても、

「何を」

笑う。

「また今度いらしてください。疵をつけたい相手の何かを持って」

「ど、どうにかありませんか」

「どうにもなりません。街の噂はあくまで噂」

たっぷりと間を置いて、やがて雨居は喘ぐようにいった。

「…き、近日中に必ず何か持参します」

その前にはまず犯人を見つけ出さなくてはならない。

しかし。と思う。

キズとはなんだろう。

実際に女が切ったり殴ったりするのではないらしいことぐらいしかわからない。

女はゴムを鳴らして立ち上がり、ヒールの音も高らかに退場した。いつまでもぼんやりしている雨居に、後ろから端神が声を掛け退室を促した。

外に出てやっと一服点け、雨居は思う。

もしかすると下手に手を出さずに、放っておくのが一番なのかもしれない。しかしそれほど凶太くはなれない雨居は、多分明日から犯人に関わるものを探すことだろう。多分それは、犯人そのもの

を捜すことよりも簡単な気がしている。

翌日。

長女の勤務していたキャバクラに行くと、どうも数か月前から娘は、妙な男に付き纏いを受けていたらしい事実が判明した。

なにかを見つめていたとする。

その目線をすつと別の箇所にか動かしただけ、違和感を感じたことはないだろうか。

視界の隅になにか見えたような。

影とも物とも知れぬ。

何と問われても明言できぬ。

いいようなない異物感のみが網膜に残る、そんな感覚。振り返って見直してみるが勿論なにもない。ただそれだけの、一瞬だけの気の迷い。

本当に気の迷いだろうか？

いや。

気の迷い。

深く考える必要など微塵もない。

本当にそうだろうか。

見れば何も無い。

見る必要もない。

気のせいだ。

本当にそうだろうか？

気にしだすとキリがない。

なぜなら胡乱な隙間など其処彼処に穿たれている。

ああ。

今見てはいけない。

今この瞬間にのみ、

なにかいるかもしれない。

ああ。

見なければ見ないで、

そのなにかが這い出してくるかもしれない。

閉まりきっていないドア

箆笥の裏

カーテンの合わせ目

椅子の下

ベッドの下

確認しなくてはいけない隙間はどこにでもある。

眼だけを忙しく動かしても、真後ろに立っているかもしれない。

あるいは足もとにいて、足首を掴まれるかもしれない。

いや、気のせいだ。  
いや、気のせいか？

気配という言葉がある。

気配というものが本当に存在するならば。

その影とも知れぬ曖昧なモノもまた存在するのではないか？

把握していないだけで存外その存在に悩まされている人は多いの  
ではないか？

不意に誰かに呼ばれたような気がして振り向く。

ああ、今は部屋にひとりだった。

本当にひとりだよな？

気の迷い、気の迷い、気の迷い。

そう。

あの、書架と書架のわずかな隙間からこちらを覗いている何者か  
もきつと気の迷い。

\*

高いヒールの靴が好きな女だ。

コンクリートを音を鳴らし、颯爽と歩く。

すれ違う人間の視線を浴び、彼女の十倍強い自己顕示欲求が充  
足されていく。

普段している仕事が目とは無縁であるので、レイコは時折こうして胸の奥に澱のように溜まっているものを浄化せんがため街に出る。必要以上に目立つ格好をして。

季節は夏。

背中の大きく開いた服とタイトなミニスカート。

今の仕事を始める前はこうした格好をよくしていたものだ。

髪も今より長く、なにより自信に満ちていた。

容姿が他人よりも優れていた。

どこへ行っても持て囃され、自然なんとも高慢ちきな女に仕上がった。

今でも根本は変わらない。だが、以前と比べ少しだけ我慢をすることを覚えた。それというのもレイコは以前、自身の傲慢さがもとで死に掛けたのだ。あり得ないかたちの事故に巻き込まれ、レイコの呼吸は停止した。骨折もし、内臓も傷ついた。命こそ取り留めたものの左目の視力と左腕の自由、そしてアルコールを摂る楽しみを奪われてしまった。

事後もしばらく、自分がどうしてそんな目（実際自分に降りかかった災難がどのようなものであったかもわかってはいないが）に遭ったのかわからなかった。

しかし今ならばわかる。

その時レイコは仕事仲間にくく怨みを買っており、その意趣返しに或る人物から特異な攻撃をされたようなのだ。

その人物とはその日に知り合い、今はどこにいるかも知らない。そしてそれがわかったところで今の段階ではどうすることもできない。もっともレイコは、今更どころしようとも思っていない。後遺症はあとを引き摺っているが、レイコはどこか異常なほど乾いている部分があるのだ。怨みといった湿った感情も言葉上の理解しかできないほどに。おそらくは生涯、怨恨というものに対して感情レベルの理解はできないのではないだろうか。

怨みに限らず、レイコには物事や人間に対しての執着もない。病

的なほどに。

たとえば。

夢にまで見た大好きな男と会う約束をしていたのだとしても、雨が降ってきたらやめてしまう。雨が嫌いだからだ。濡れるのが嫌なのではなく、雨に濡れたアスファルトのにおいが嫌いなのだ。特に夏は最悪である。そしてそんなふざけた言い訳を特別隠さずそのまま相手に伝える。もちろんそれで終わりになることは多いが、レイコとしては自分のすべてを笑顔で受け容れられないような狭量な男など端から願い下げなのである。

話は逸れたが、いずれにせよ世の人には執着心があり、それが他人を羨んだり怨んだりする感情へとシフトするのだろうとレイコは思う。しかしやはり、理屈だけはわかるがピンとは来ない。ピンと来ないまでも、他人に悪感情を抱かれ結果半死半生の経験をしたのはまぎれもない事実である。

他人に必要な以上に嫌われるのもあまりいい気はしないので、少しは他人の気持ちを考えてようかと流石のレイコも思ったわけである。なんのことはない、自己防衛だ。

角を曲がる。出会い頭に顔の長い身体の長い男とぶつかりそうになった。男は半歩身を引いたが、レイコは軽く眉間に皺を寄せ、相手が横にどけるまで当然の顔で待った。

長い男はどんよりとした眼差しでレイコの胸のあたりを見つめた後、するとレイコをかわして歩き去っていった。

服のセンスはいまいちだが香水の趣味は悪くない。レイコはそんなことを思う。

レイコが今の仕事をはじめたきっかけはスカウトである。

前述の事故で死に掛けて以来身についた異能に、方法はわからないまでも今の担当者が気がついたそうなのだ。

破格のギャラで交渉を持ち掛けられ、そして担当の男がレイコ好

みだつたから、レイコはふたつ返事で契約書にサインした。

昔も今も行動の軽薄さだけは治らない。

仕事自体は、多少苦しいが短時間で済む。その上、たった一度の仕事で前職のひと月分の報酬が振り込まれる。

短時間で高額。これほど旨い仕事が他にあるだろうか。しかしレイコは、もう少し貯蓄ができれば辞めてやろうと思っている。闇の中延々と他人の暗部を覗く商売である、流石に最近はやや食傷気味だった。

苦しいのももう厭だった。

レイコは呼吸が苦しくなると他人の意識に僅かばかりの傷を付けることができる。

傷について少し詳しく説明するなら、傷をつけたい対象に関連する物品から意識を対象に飛ばし、対象の思考を垣間見、そしてその思考に恣意的に彼女の意思を差し挟むことが可能なのだ。レイコはそれを瑕疵を与えると客に説明する。それは偏に、客の求める差し挟む意思が大概が悪意に満ちているからだ。

この異能の面倒なところは、我が意識で止めたのでは意識を飛ばすことをできない点であろう。だからレイコは、全身を一部の隙もないゴム素材の衣服で包み、あまつさえ呼吸弁に細工を施したガスマスクを顔面に装着しなくてはならない。その時点で軽い眩暈を催すほど息苦しいのだが、更に最終的には呼吸弁を完全に閉止しなくてはならない。大抵の場合レイコは気を失うが、死ぬようなことはない。レイコの傍にはいつもスカウトした男、端神がいるからだ。レイコは今では端神を甚く気に入っている。

だから自らの能力を使い、どうにかものにできないかと試そうと思ったことが何度かある。思うだけで、危険が伴う故実行はしない。

煙草をやめてからというもの（勝手にレイコは端神は煙草を吸う女は嫌いそうだと思っている）、コーヒーの量が増えた。ブラック

は飲めないので最近では微糖ばかりを飲んでいる。おかげで舌先や口の端が荒れている。

そして思いだす、何日か前に訪れた若い男の件。

どこでどう繋ぎをつけたのか、且つまた、どうして端神が通したのかわからぬほど安っぽい今時の男だった。

口調こそまともだったが目が血走っていた。

手に握り締めた土塊をレイコの眼前に突き出し、殺された子供がいる、殺した奴を捜してほしいと何度も何度も繰り返した。

男の説明では、どうやら親に虐待されて死んだ子供らしい。

どうしてその親を捜したいのか、子供とどういう関係なのか、レイコは何度も尋ねたが男の返答はまるで要領を得ず、その子供と出会った場所をいい、ただただなんとかしてくれ、捜してくれを繰り返す。

小学校低学年くらいの男の子。

男の言葉の継ぎ目継ぎ目に子供の特徴を聞いていき、やがてレイコは別の意味で息が止まりそうになった。

思い当たる節がある。

思い出したくもない過去だ。

レイコは昔、男と同棲していた。

その男には子供がおり、どうやらそれは逃げた女房との間にできた子供のようなだった。

レイコは男にのみ用があったわけで当初子供には興味はなかった。しかし男は、男なりに子供を愛していたようなので、それに合わせてレイコも子供に気に入られようと努力した。なにより男に嫌われなくなかったからだ。

五才の男の子だった。

あの日。

そうだ。レイコははっきりと思い出す。

秋に入った頃だった。

インフルエンザに因る臨時休校でいつもの時間より早く男の家に  
行くと、家には見知らぬ女がいた。

子供が今まで見たこともない笑顔を見せていた。

男も苦笑いのような照れ笑いのような曖昧な笑顔を見せていた。

その男の顔もレイコは見たことがなかった。

男と女はレイコの顔を見て動きを止めた。

高校一年のレイコは、それでも瞬時に理解した。逃げた女房が戻  
ってきたのだ。

そこからはどうにも記憶が曖昧だった。

ただ最初に、靴箱の上に置いてあったガラスの花瓶を手に取った  
ことだけは覚えている。

手当たり次第に殴りつけた。制止の声と泣き叫ぶ声と子供の悲鳴  
喚いて、暴れて、気づけば川縁を歩いていた。

制服のスカートとローファーが一足なくなっていた。

その時のレイコの右手にはありありと頭蓋の潰れる感覚が残って  
いた。

努めて忘れようと心掛けていた事実。

自分は子供を殺したかもしれない。

思うにその後騒ぎになった記憶はなく、それほど大事ではなかつ  
たのかもしれないと思う反面、誰かの頭に花瓶を叩きつけた感触だ  
けは今もレイコの右手に有る。そしてその感触を思い出すのと同  
時に、男の子供の名前を連呼する声が耳に蘇るのだ。

若い男の語る場所と、おそらくはこの世のモノではない子供の年  
格好。レイコの記憶の風景と符号の多いその情報に、レイコが戦慄  
を覚えるのも無理からぬこと。

どうい理由からはわからないが、若い男はおそらく自分を捜し  
ている。

そしてやはり、あの時の子供は死んでいたのだ。

だからその時、レイコ、いやゴム女は事実を隠し、嘘の託宣を述べた。

本来的にその場でのレイコの仕事は探し人ではないのだから（それと勘違いして訪れる客は存外多い上、見つげられることも多々あるのだが）、それに対しての罪の意識はまるでない。

背後で見守る端神だけは、どうやらそれに気づいていたようだが。

世の中とは思いつりにならないものだ実感している。

それでも、歩けば歩いたなりの、それなりの収穫はあったが、あくまでもそれはそれなりに確信を得るほどのものではなかった。

このところ友人宅を泊まり歩いている。友達といえどそれなりに気を遣うタイプである故、安息はあまり得られず、つまりは疲労が溜まっていた。

公平はここ数日、あの得体の知れぬ子供の正体を探ろうとしてい

る。  
無論誰に頼まれたわけでもない。しかし好きでやっているわけでもない。

あの夜、菩薩顔の男が退治したはずの毬をつく子供は、その後それほど日を置かずに再び公平の部屋を訪れた。

深更、激しくドアを叩く音に飛び起きた公平は魚眼レンズから廊下を覗き見て戦慄した。

消えたはずの子供がいる。

唸っているのか吠えているのか喉の奥底から耳触りの悪い声を延々と発して、まるで無表情にドアを叩き続けていた。

公平はどうしていいかわからず、ドア越しに帰ってくれ勘弁してくれと繰り返し返したものだ。

そもそもがどうして自分が狙われるのかわからない。本当にあの時の何気ない一言が原因なのだろうか。

なにかも公平の理解の範疇を超えている。だからその後すぐ、二階だというのにベランダから飛び降り、何も持たずに遁走したのも無理からぬことだろう。

とにかく怖かった。

菩薩男のいない状況で、あの怖ろしい子供と対峙したならばいっ

たいどんな目に遭わされることか。

どれだけ走っても、公平の部屋の鉄扉を叩く音は耳に届いた。いったい何故。

離れたことによる安堵感から公平は気づく。いったい何故あれほど大きな騒音が出ているというのに誰も起きてこないのだろう。疾走しつつ振り返ったアパートは公平の部屋のみに明かりが点いているばかりで、あとの部屋は真っ暗だったのだ。

隣室の若夫婦はいったい？

知らぬうちに引越したのだろうか。

公平はぞくりと身震いした。

子供の再訪を受けた翌日の正午過ぎ、管理人に適当ないい訳をして部屋を開けてもらい、とりあえず必要な物を持ち出してこっち、あのアパートには戻っていない。その段に及び、公平は初めて自分の居住するアパートの管理人の顔を見た。どうしてか真夜中の騒音について尋ねる気にはなれなかった。なんのことはない、変な目で見られるのが厭だったのだ。

どうにかしなくては。

どうにか問題を解決しなくてはなるまい。

他の者ならばさっさと居を替えて終わらせるところか。しかし公平は、部屋を引き払うにしても、とりあえずはあの子供をどうにかしなくてはならないだろうと思っっている。その思い込みは多分不要である。決して好奇心や、その他の陽性の思考によってそう思っっているのではなく、強いていうなら気になっている。

それを憑かれているというのなら、確かに公平は取り憑かれているのだろう。

幽霊。

亡霊。

怨霊。

その区分すら公平にはわからない。ただ生きていないのだけは確

かなのだ。あのような出現の仕方、あのように一度消し去られ、且つまた出現した、そんな子供がいるとしたなら幽霊の存在云々よりも大事件だ。

そういえば。

公平は以前テレビ業界に籍を置いていたことがある。とはいっても身になる経験を積む前に挫折してしまい、今では合コンの話題のひとつになり下がっているほどの過去だ。

挫折の理由は公平自体に落ち度があったわけではない。

数年前の或る日、公平の眼前で人に雷が落ちた。

公平自身には怪我はなかったが、目の前で人が焼けるのを見てしまった衝撃は酷く、その後しばらく軽いパニック障害になった。結果としてその精神障害の発症が、公平が仕事をやめるきっかけとなった。

しかし問題はそこではない。

公平は怪我人に付き添って救急車に乗ったため、その後の信じ難き光景を直接目撃していないのだが。

常夜灯のみとなった総合病院のロビーにて。

鎮静剤の影響で霞む目で見た、現場に残ったスタッフと演者が撮影したその後の状況。

実に理解不能な光景だった。

影と少年と女。画角の定まらぬ映像に捉えられた正体不明の三人。少年と影が戦っているようにも見えろが、果たして。

影に顔がなかった、だの。少年に目がなかった、だの。女はあの時点で既に死んでいた、だのと実に失笑してしまうような話題が飛び交ったものだ。しかしそれよりも大騒ぎとなったのはその後起こった爆発とビルの崩壊だった。そんな不可解で派手な事件でも死人が一人も出ていないせい、数年経った現在ではその事件を取り立てて口にする者もなく、爆発と崩落のあったビルも、今はとても近代的な高層ビルに替わっている。

結局なにをいいたいのかというと、公平が今まで経験した不思議

な体験といえばそれぐらいのものだったということ。

随分と濃度の濃い今回の事態に簡単に霞んでしまい、今まで微かにも思い出さなかった数年前の過去の話だ。

早足で歩いてきた足を止めた。

今日の目的にしていたひとつ目に到着したのだ。

看板には「TRUEBLUE」とある。

外観は高級そうに設えてあるが、なんのことはないどこにでもあるキャバクラだ。

公平は暫時看板と入口とを交互に見ていたが、やがて意を決したように中に入った。店に入るなり如何にもヤンキー上がりといった風情のボーイが出てきて、いくつかの接客常套句を早口に並べ立てた。公平は半分聞き流しながらいい加減に頷き、薄暗い店内を隅々まで見渡し、

「この店に唯つてコがいると思うんだけど」と訊いた。

「ああ、唯ちゃん？ いますよ。どうぞ」

「いや。あ。呼び出してもらえます？」

公平がそういうとボーイは露骨に目の色を変え、あんなナニモンと返した。

「…え。あ、まあ。人捜し？」

必要以上にしどろもどろになりながら、公平は小声で答えた。一瞬にして全身が汗ばむ。結局は気が小さいのだ。

ボーイは何だソレとぶつくさいって、

「どうすんの？ 客じゃないんだろ」といった。

公平は一度ちらりとボーイの目尻のあたりを見、出直しますといつてそそくさと店をあとにした。端から計画性のある行動ではない、

手持ちの金などほとんどなかった。しかし、諦めることもまたできなかった。何故なら、公平が独自で調べた結果、この店で働いている唯という女性が過去、公平のアパートの近辺にいたという話があり、加えてその女性の周囲に五、六才の男の子もいたようなのだ。なんら確証のある話ではない。素人なりに聞き込みをした結果である。

結局店の外で待つことにした。

店を出てくる女の子に片っ端から声を掛けていく。

大半は怪訝な顔をされ、何人かに声を掛けた段階で店からあのボーイが出てきて、公平は殴り飛ばされた。

公平は更に場所を替え、辛うじて店の見える位置まで移動する。

この際何日掛けてでも唯という女を見つけてやろうと、そう思っている。出てくる女、ひとりひとりを追跡したっていいとまで。妙な持続性だけは旺盛だ。それに繁華な町に埋もれることで、随分と恐怖は和らぐ。

そんなことを考えながらただ佇んで、二時間くらい経つたろうか。ひとり、遠目にも香水のきつい匂いが届いてきそうな若い女が店から出てきた。と、店の奥から大声で唯ちゃんと声を投げられ、振り返り、なにやら笑顔で返している。

ほらな。努力は報われるんだよと公平は腹中ほくそ笑んだ。

あのボーイが出てきてもつまらないので、遠くから尾行する。

唯はどうやら駅に向かっていているようだ。ぎりぎり終電に間に合うくらいか。

珍しい色のハイヒールを目印に、公平は静かに追跡した。

なんとか電車に乗る前に声を掛けねばと、そう思っていたが、自動改札で引っ掛かってしまった公平は結局目的地もわからぬまま電車に乗る羽目になった。

逃がしてはなるまい。

あの子供と繋がりがあるのかどうか、それを確かめねば公平は眠ることすらできぬまでに追い込まれつつある。

だが。

唯が降車した駅は案外人が多く、結局公平は唯を見失ってしまったのだ。彼なりに細心の注意を払ってやっていたつもりだったのにと臍を噛む思いだった。だから公平は、今度はその駅に河岸を替え、張り込みを続けることとした。顔はよく記憶できなかったが、少し独特のファッションセンスのある女であったので、再度現れればわかるだろうと、そう思っ

て。なけなしの金で煙草を買い、日がな一日駅を眺める。

まるでドラマに見る刑事などと、ありきたりのことを考えながら。翌夕方。

唯は現われた。

昨晚と同じ色のハイヒール。時間帯を考えてもこれから店に出勤するのだろう。

公平は底の見た財布と相談して、そのまま駅で唯の帰りを待つことにした。

そうした地味な行動を繰り返して、公平は思い当たる人間ひとりひとりの身辺調査を繰り返している。

唯という女。

アマイスナオ

本名は兩居直というらしいことがわかった。

公平は何度か直接子供の件を訊ねようと接触を試みたが逃げられてしまった。それはそうだろう、誰がどう見ても公平は怪しい。

「これじゃストーカーじゃないか」

そんな気持ちの悪いものと勘違いされたくないものだと思いつながら、公平には他の手段が思い浮かばない。事実その当時、唯こと直は店の仕事仲間に最近ストーカーに付き纏われてと苦っぽく語っている。

そしてそこまでのことをしておいて、公平は仮に子供を虐待死させた親（それ自身が公平の想像であるが）を見つけ出して後、どうするかを決めてはいない。

責任をとれとか、罪を償えとか、社会倫理に照らせば確かにそれはそうだろう。その手の気持ちも僅かながら内在してはいるのだが、それはおそらく、公平などが強弁するようなことではない。どちらかといえばただ単純に、自分の味わった恐怖を、発端を起こしたであろう誰かにも味わわせてやりたいと、そうした感情のほうが大きかった。

あの子供は酷いことをされ、怖い思いをして死んでいったに違いない。

ならばその行為を為した何者かも、それと同等の、否それ以上の恐怖を味わって然るべきだろう。

その思い込みは危険である。

公平は自らの行動を正当化しようとしている節がある。

自己偏愛の強い、独善的な性格をしているのだ。

此の世に何も為さぬまま、人知れず其の生涯を閉じるのだ。

駒場祐一郎は自分の行為が世の中を変えるほどの力があるとは微塵も思っていない。

単純に目の前の怪異を消し去りたい。それだけだ。

生まれも育ちも平凡で、好きな時に好きなことをするそれだけで十分な、ずっとそんな人間だった。

あの瞬間までは。

ほんのりとした幸福感に包まれながら、その日駒場は人待ちをしていた。

人並みの未来を頭に描きつつ。

駒場はにこにこしながら、なんの記念日でもなかったが購入した贈り物を携え佇む。

こうして自分は年老いていく。

それでいい。

心から愛しく想う者と一緒にいられるのならそれだけで。

出会いは大学構内。

駒場の読んでいた本を覗きこみ、一言趣味が合うねと。

そのまま横の席に腰掛けた。駒場は少し戸惑いながらも言葉を返した。

綺麗な顔をしている。

駒場の第一印象はそんなもの。

それでもその後、何度か大学内でお互いを見かけるうちに二人の距離は近くなつて、どちらともなく手を繋ぐようになって。

音楽の趣味も、好きな食べ物も、休日の過ごし方もまるで違つたけれども、ただ初めてお互いに会つた日に確かめ合つたようにお互いが一番好きな本だけは同じだった。

それだけで二人はずっと話をしたものだ。

なんとも思春期過ぎの中学生のようで甚だ青臭いが、その時間は駒場にとってなにものにも替え難い貴重な時間だった。

目を閉じ、その瞬間を想起するだけで、その時味わっていた幸福感が蘇り涙する。

その瞬間はもう二度と駒場に訪れることはないのだから。

あの日。

激しい雨と雷の中、石動の駅近くの駐車場。そこに停めた車の中で、これから食事でもするかと話をしていた。

とりあえず雷雨が止むまでは駐車場を出ないでおこう。

それにしても酷い雨だ。

恋人が煙草を吸う。

メンソールのアメリカ煙草だ。駒場は途中でそれを奪い、自分の口に銜えた。

その時の恋人の表情を、駒場は一生忘れない。

駒場は恋人の手によって車から突き飛ばされ、状況を理解する前に。

轟音。

アスファルトに顔面を打ちつけた、その痛みを感じる前に、瞬間的に暗くなった視界に駒場はまず恋人の姿を探した。

酷い砂煙に目も開けていられない。

その名前を呼ぼうにも息も吸えなかった。

酷く咳き込み、涙が止まらない。

その時の苦しさを、駒場は今でも覚えている。そしてその苦しきなど所詮は。

一陣の風。

砂煙が少し薄れ。

瓦礫。

瓦礫。瓦礫。瓦礫。

なんだこれとは駒場は呟く、叫ぶ。

駐車場の横にあった古いビルが倒壊していた。

雨は上がっている。

駒場は車のあった方を見た。

車のあった位置。二人の乗っていたフォルクス・ワーゲン以上に大きなコンクリートの塊がかわりに視界に入ってきた。

喉から血が出んばかりに絶叫した。  
実際口の中はいたる所が切れており、鼻からも血が出ていた。

なんなのだろう。

なんなんだこれは？

その時の強烈な憤怒はそのまま、その時駒場の網膜に灼き付いた  
光景と繋がっている。

影。

少年。

裸の女。

比較的理性的に今までを生きてきた駒場でも、かけらほども冷静  
に考えることができない。

少しずつ、狂う。

気づけば駒場はまだ叫んでいた。

最早肺臓に酸素はなく、喉の奥から嗚咽にも似た音がか細く漏れ  
ていた。

気づけばコンクリートを掻いていた。

とても持ち上がるものではない。だから駒場はコンクリート塊を  
手で掘って恋人を助け出そうと。

見る間に爪は割れ、血が噴き出す。

泣くも笑うもない。

ただただ、もう一度顔が見たくて。

生きるも死ぬもない。

自分の目の前から消えた現実を受け入れられない。

あたりはどうかやら騒然としている。

遠くにサイレンが聞こえる。

ああ誰か呼んでいると駒場が一瞬その場を離れた、その瞬間車のあつた地盤が崩れ落ちた。

まるで噴水のように水が空高く吹き上がった。

全身を濡らし、駒場は沈んだ場所へとふらふらと再び歩み寄る。

助けにきた何者かに羽交い絞めされていることにも気づいていない。

足だけは前に行こうとしていた。

一塊に辛い、有り得ない経験。

ひと月近い搜索もなんら実を結ばず、結局駒場の恋人は行方不明者として処理された。

おそらくはあの場所の地下に埋まったままなのだろう。

それを考えると今でも駒場の心は引き千切られそうになる。

何度も現場に侵入して地面を掘っては捕まった。

その受け容れられぬ現実を、なんとか自分に認めさせるために、駒場はその後自分なりにあの事故（結局ガス爆発事故で処理された）のことを調べはじめた。しかし調べれば調べるほど謎は妙なかたちに歪むばかりで、微塵も納得のできる事実が現出することはなかった。ただひとつ、この世にはどうかやら人とは別の何者が存在していることだけはわかった。

その何者かとは、あの場所にいた三人に他ならぬ。

あの状況、とても奇異な三人だった。

人でないのなら、あの惨事はその三人がきつかけなのではないか。

おのれひとりではとても抱え切れない感情を何かにぶつけねば息をするのも儘ならぬ当時の駒場が、その三人に対して無根拠に悪感情を抱くのも無理からぬことなのかもしれない。そして最初こそ無根拠であったが、結果としてそれは間違いではなかった。

あの事故には確かにその三人が深く関わっていたのだ。

そしてその三人は確かに人外だった。

生来生真面目な駒場は、その後自分なりに学び、励み、やがて独学独力ながらもおぼろげな技術を得るに至った。

悪霊、厭鬼、妖物、その被いの術を。

すべては恋人の仇をとるため。

それ以外になにもない。

それに必要ならばどんなことでも受け容れる。

我が身を清める意味で敢えて着慣れぬ服を着、髪の毛はあの日以  
来切っていない。

過去がもう辛いものでしかなかった。すると不思議にも、心の  
伴わない笑顔が勝手に形作られるようになった。

こうして、超常現象被い（スーパーナチュラルバスター）駒場祐  
一郎が誕生した。

世の怪異の悉くを滅却し、やがては。

影の行方はわからないまま。

女も同様。

しかし少年は、どうやらミササギリヨウという名前と知れた。

だから駒場は場当たり的に悪霊などを被いつつ、今日もリヨウの情報を得ようとする。

心に在るのは常に二度と掻き抱くことの出来ぬ恋人のことであり、だから駒場は決して正義の人ではない。しかし彼の為す行為に依って救われている者がいるのも事実で、その行為のみは正義といえる。精神性はどうでもいいのかもしれない。

行為のみを評価するとすれば、頭で何を考えていようと。

頭の中は結局、個人の空間なのだ。

だから他人を批判をするなら、その行為のみに対してどうこういうべきで、決して心の裡まであれこれ意見してはならない。

駒場は正義の人である。

ミササギ霊。

最近はどうやら石動駅近辺のとあるバーに出入りしているらしい。駒場は害意を持った人間外のモノをこの世から消し去ることを決意してから、まずおのれの目を鍛えることをはじめた。

曰くそれは多く、かそけき存在であると耳にするからだ。しかし鍛えるといってもまるで見当がつかなかった。だから駒場は、暗中模索する暗の部分をまず模索することからはじめねばならなかった。結果としては、素養があつたのだと思う。

おそらく努力でできることには限界のある業界（？）だとは思っただ。似非以外は。

見えて次は本題に入る。

シテ如何様に被い除ける可？

駒場は図書館に通い詰め、やがて四国へ発った。

決して明らかな確信があつての旅ではなかつた。また、行つてどうにかなるような宛ても一切なかつた。ただそれでも、空港に降り立ち、バスに乗り、やがて見えてきた奥深い山々に、少しだけ回復の兆しを自分の中に見つけた。そして、現地にいる袂いを生業にしている者に会うことも出来た。だが、弟子入りだのましてや修行だのは、やんわりとした口調で、そうしたものではないからと断られてしまった。

ただそれでも。

そうした、普通は目に見えない世界を緩やかに享受する場所が現代の日本にも存在したという事実。それだけでも、駒場にとっては掛け替えのない経験だつた。

まるで諦めることなど考えてなかつた駒場は、袂いが行われている現場を駆け回り、まさに門前の小僧習わぬ経を読む状態でその秘された技術を吸収していった。それしかろくな方法が思い浮かばなかつたのだ、致し方あるまい。

繰り返すが、確かに駒場には素養があつたのだろう。

本来どれくらい修行でものになるのかは知らぬが、潜伏して半年、見様見真似でそれなりの仕上がりになつたのだから。

ただし、飽くまで見様見真似。雑多ない方をすればパチモンである。

パチモンは人型に切り取つた紙を道具として使う。

紙に念を込め、紙に命を吹き込み、護法神として使役する。おそらく本格的に修行したならさぞかし頼もしい護法神を現出させることが可能であろう。なにせ駒場は、盗み見た情報のみで、（ひとりひとはそれほど力がないが）一度に十一人もの式を打つことができるのだから。

ミササギ霊。

駒場祐一郎は菩薩のような薄笑みでバー石畳の扉を開けた。

父様が亡くなった。

葬儀は遺言通り親族だけの密葬でしめやかに行われた。それでも父様は地元の名士であったから弔問客は引きも切らず、いまだ跡を断たない。対応は家の雑務一般すべて任せている嶋さんがすべてこなしてくれたので、今や唯一の血縁者となってしまった私はただただ悲しみに暮れるだけの毎日を送るだけでよかった。とはいっても一切悲しいとは思わなかったけれども。

父様は私の将来を酷く心配していた。

それはきつと私がまったく男性に興味を持たず、婿養子をもらう素振りがまるでなかったからだろう。

父様としては私可愛さよりも家名が絶えてしまうことこそが気懸かりであつたはずだ。

しかしそれは自業自得である。

父様は生きたいように生き、そして死んだのだ。その結果三百年以上続いた家名が絶えることとなっても仕方のない人生を謳歌したはずだ。

正妻との間には子はできず、結局私のような妾腹の子に家の未来を託した。

私が高校生になった頃だ。私の母が病に倒れ、母の命の期限が区切られるや、私は顔も見ただけでもない父様に引き取られた。

母一人子一人で儉しく、それでも懸命に生きていた私にはまさに寝耳に水の出来事だった。

病床の母は私の手を取り、涙だけ流した。

きつと悔しかったのだと思う。

結局愛情だけでは我が子を守り切れなかったのだから。

それからしばらく、私は父様の家から学校と病院へ通う生活を続けた。

その若干歪んだ生活を送っていた当時何度か、父様にいわれたことがある。本当はお前のお母さんと結婚したかったのだと。当時の私は実に素直に、だったら何で結婚しなかったのかと憤ったものだ。でも今ならばわかる。父様が若かったその当時、自分の意志で結婚相手を選べた者などはたしてどの程度いたのだろうか。

ただ、引き取られてからも特別愛情をかけられた記憶はない。

だいたいが私は、普段使用している姓は未だに母方のままだ。

父様の所有する様々な権利や動産、不動産など、そのほとんどが含まれた相続権こそ私に譲渡されているが、姓を変えることだけは断固として拒否した。それは唯一、私が父様に見せた意志である。

父様の、その時の泣き笑いの顔を私は生涯忘れないだろう。

私の緩やかな復讐心は、そんな老人の悲喜交々の表情を見ることが幾分和らいだものだ。

話は変わって。

私には人にはない能力がある。

異能。

超能力。

呼び方は様々あると思うが、わたしのそれは遠く離れた場所の情景をまるで自分の目の前で展開されているかのごとく見ることができ。

人にはないものを持つのは少し嬉しくは思うのだけど、いつだったか強姦の現場を目撃してしまったことがある。夢や幻ならばそれでいい。しかし目の前で展開されたその惨劇はとても夢などの曖昧な感覚はなく、まるでリアルだった。その女性が誰なのか知る由もない。その後も数度、私の意識は彼女の目前まで飛んだことがあるが、彼女は倦み疲れた、じっとりとした視線を私の方に向けるばかりだった。もしかすると彼女には私が見えていたのかもしれない。それにしても、どうして彼女に纏わる情景ばかりが見えるのだろうか。

無論ほかの人間の情景も実にたくさん見る。しかし今まで見た衝撃的な情景はその女性のもののみだった。もしかするとなにかしら、私とその彼女には同調する波長のようなものがあるのではなからうか。

素人考えで根拠もなにもないが。

その女性がレイプされた時も、私は矢庭にうろたえたただけだ。しかしその場に存在しているのはどうやら私の思念のみで、そんなあるかなしかなものでは結局どうすることもできなかつた。

どうすることもできなかつた。

最初から最後まで。

どうすることも。

正直にいうなら。

あの時たとえどうにかできたとしても、私は多分どうもしなかつただろう。

アマイスナオ  
雨居直。

それが被害女性の名前。

私と同一年くらいか。

私はどうも自分の年齢を数えるのが下手だ。

私は彼女を初めて見た時、先ず彼女に嫉妬した。

最初はどうして自分の中にそうした感情が芽生えたのかわからなかつたが、どうやら。

彼女はべらぼうに美しかった。

酷く愛らしかった。

顔も仕草も声も、なにもかも可愛かった。

それが私には、とても妬ましかった。

私はちつとも美しくないから。

私は結局、世間では拒否される類いのもの。

世間の枠組みに嵌まるものではないし、有益か無益かを測る尺度も存在しない。

ため息をひとつ落とし、無意味な内省を打ち切る。

そういえば。

不図思い出す。

何日か前、どこから聞き付けたものか大柄な男と長い男が私の異能について知りたいと訪ねてきたことがあった。どういう内容の会話をしたのかいまいち覚えていない。ただその大男が矢鱈と魅力的だったことだけは覚えている。

本当に用件はそれだけだったか。

私ではなく、父様のほうに用があつて来訪したのではなかったか。精神安定のために飲んでいる薬のせいか、最近記憶のほうも曖昧である。

うまく生きられない。

世の人もそうなのだろうか。

他人に比べ堪え性がないのを自認してはいるが。

美しいものが好きだ。

あの男の名はなんといったか。

\*

石川悪四郎は日比野子雄の作りだした新興宗教長寿教を我がものとして後、平素中規模及び大規模の集会を行っていた長寿教本部ビル内の大ホールの改良から開始した。

改良といってもホール内にあったパイプ椅子をすべて撤去したのと、柱や壁に貼られていた垂れ幕やらポスターなどを剥がしただけだが。

悪四郎自身は三人掛けのソファに腰を落とし、背凭れに両腕を乗せた状態で日々様々な報告に耳を傾けている。

それで何をするのか。

今後どうするのか。

今や側近の一人となった子雄ですら、彼の鉢の大きな頭の中に秘された青写真を窺い知ることとはできなかつた。

日々悪四郎は様々な人間と顔を合わせ言葉を交わし、且つ西に人物がいると耳にすれば馳せ参じ、東に有能者の噂を聞けば急ぎ足を向けた。

平常時悠揚に構えているだけにそうした時の腰の軽さに、子雄などは最初戸惑った。

それでも悪四郎に仕えていると、何故だか子雄の気分は高揚した。ちなみに子雄は、女装癖はあるが男色家ではない。

「日比野君」

「は、はい!」

「時に君は、潤目民子という女性を知っているかね?」

「は、はい。知っていますが…」

「あの女性はいけない」

「それは、どういうことですか…?」

最早平伏しているようになって話を聞いていた子雄は、眉と目だけを悪四郎に向けた。

「私の事業に唯一水を挿せるとすれば、彼の女性だけなのだ」

わからない。だから子雄は、ものはついでとばかりに常々思っ

いたことを尋ねてみた。

「あの、石川様。…よ、世の中の様々な能力者を発掘して、それで  
いったいどうなさるおつもりで？ 事業とはいっただい…」

「聞きたいかね」

悪四郎は子雄に顔を向けた。

悪四郎の顔には、言葉では表現できない異様な威圧感がある。特別傲慢でも強引でもないのだが。

ただ決して厭な圧力ではない。圧倒的な強者であるように感じられる故か、悪四郎に魅入られた者は大概、彼の大きな存在感に我が身を委ねることを心地よく感じてしまふのだった。

「聞きたいのかね」

「…は、はい…」

悪四郎の表情は滅多に変わらない。比較的多弁なほうであるのだが、言葉を発する時も口をほとんど開かない。

「この国を」

「こ、この国を？」

「昔の姿に戻す」

「昔の姿ですか…？」

「昔は良かったと、そんな台詞聞いたことあるかね」

「はあ。年寄りがよく口にしてるのを耳にします」

「それを実現するのだよ」

一億三千万人から二千万人へ。

「このような小さき島国に、今の人口は多すぎる。そうだろうか？」

「は、はあ」

「多いのだよ」

「はい」

「数の不均等はそのまま下々の日常の破綻を生ず。今の世の中を見てみたまえ、人民は皆逼塞しているではないか」

「たしかに」

「だから間引きを行う。日本全土をひとつの共同体と考えるの口減

らした」

「口減らし…しかしですね」

反論などせずとも、自分はただハイハイと頷いていればいいのではないか。それで十分心地良く、満ち足りた気持ちになれるのだから。

子雄は少し潤んだ瞳でとんでもない構想をぶち上げた男を仰ぎ見た。

「それはその…無差別殺人ということでしょうか？」

大仰な構えを取っておいて、その実ただのテロリストなのか。

しかし悪四郎に限ってそんなことはない、子雄は強く信じている。

「間引きだよ、日比野。不必要な人間を切り捨てるのだ」

「そ…その、必要かどうかの線引きをするのは」

私だよ。

悪四郎は特になんの感情も込めず、そういった。

子雄は再び平伏した。

「世に埋没する能力者を発掘し、我が望みを一日でも早く現実のものとするために協力してくれ給えよ。今名づけよう、大日本先祖返り計画」

「大日本先祖返り計画…」

子雄の興した宗教を礎にその潤沢な資金を活かし、通常人が持ち得ない行使し得ない力を持った者を探す。

偏に、この世の中から一億人以上の人間を粛清するという途方もない計画のために。

可能か不可能かは子雄は考えない。

ただ純粹に、目の前のカリスマに従うだけだ。

瞑目するたび、抹香と読経が耳鼻に蘇る。

実姉の葬儀以来、蜜は夜中でも電灯を煌々と点けていなければ眠られぬようになってしまった。

あまり姉妹仲が良くなかったとはいえ、姉の死はそれは哀しかった。

有り得ない形で姉を喪い、蜜は通夜の夜から初七日を過ぎても延々泣き続けたものだ。此の世にこれほど辛いことがあるのかと寝ても覚めても嗚咽を漏らし、無闇に父を詰り、常態から逸れてしまった母を恨んだ。しかし、そんな哀しみも話に聞くように、本当に時間の経過と共に薄れていった。それがまた未だ幼い精神を多分に有している蜜には信じられなかった。なんとおのれの薄情なことかと、姉のことを考えぬ時間が増すたびに蜜はそう思ったものだ。

しかし。

人間の感情など所詮社会生活の中の僅かな振幅でしかない。そうでなくては人の営みは停止してしまう。しかしその、どちらかといえば動物的に近い感覚に年若い蜜などが戸惑うのも無理からぬことではあろう。

近親者は勿論のこと、葬儀というものの自体に初めて参列した蜜の小さな心の器は、姉の遺体が火葬される段に至り明らかに変調を来した。結果それは蜜の精神に僅かとはいえぬ瑕疵となり、哀しみが薄らぐのと同時に今度は悪夢に苛まれるようになってしまった。

顔の見えぬ何者かに襲われ助けを乞う姉を傍観する蜜。

どうにかしなくてはと思いつつも何故だか身体は動かない。

携帯電話が震える。蜜は着信を無視する。

気付くと姉は血塗れで絶命している。

やっと身体が動く。

一步、また一步と姉に近寄る。

近寄る。

そこで夢の中の蜜は必ず瞬きをし、目を開けた時、眼前にはいつもの姉が立って居、蜜に何かをいおうと口を開けたその時、姉の喉の奥からめろりと炎が

目からも、耳からも、そのうち姉の前身は炎に包まれ、そのまま蜜に迫ってくる。

いつもそこで目覚め、蜜は耐え難き恐怖感に苛まれる。

姉はきつと自分を恨んでいるのだと蜜は毎夜思った。自然睡眠を遠ざけ、仮に床に入っていたのだとしても電灯を消せなくなったのもいたしかたないことといえよう。

それでも眠らなければならぬ。

精神的なダメージは多分に受けているが、身体はいたって健全であるが為ある程度の活動限界を超えると眠くなる。眠りたくはないと我が睡魔に強く抗うが、所詮そんなものは無駄な足掻きに終わる。そして眠れば必ず夢を見た。

燃える姉。

汗みずくで目覚める蜜。

この繰り返しだ。

ただでさえ手酷い打撃を受けている蜜の精神はこの重ねられた衝撃で崩壊するかと、それは蜜自身も思った。が、蜜は自分が思い感じるほど弱い人間ではなかったようで、煩悶を数日経てその辛い現実をなんとか自力で是正しようとする方向に顔は向いた。

姉を殺した犯人を捜す。

とりあえずは姉の暮らしていた町へと行ってみるかと、うる覚えの住所を頼りに蜜は部屋を出、駅へと向かい電車に乗った。

警察も、そしてどうやら父も日夜殺人犯を捜してはいるが、その行方は杳として知れない、その犯人をである。なんの力も持たぬ小娘がうろつる動き回って、どうにかなるとは流石に思わないまでも、そうすることが生前ほとんど没交渉だった実妹からの手向けになる

ような気がした。  
それに。

時間的に考えてもおそらく姉が殺される前に送信したであろう蜜宛ての不可解なメール。姉は何を自分に伝えたかったのか。

平仮名二文字、「い」と「わ」

蜜が想像するに、珍しく妹に用があつてメールを作成している最中に犯人に襲われたのだらうと思う。それ故前述のような意味のわからないメールを送信してしまったのだ。まさに殺される寸前だったのだ、理路整然とした文章を送り付けられるほうがおかしい。

「てかお姉ちゃん、警察でも電話すれば良かったのよ。電話手に持ってたんだから……」

一抹の寂しさを抱えながらまるで文句を垂れるように独り言をいう。

蜜が携帯電話の画面から顔を上げると、車内は俄かに混んでいた。ふ、と線香の匂い。

「……え？」

なんだろう、この黒い集団は。  
葬式だろうか。

皆一様に暗い顔をし、俯き加減で立っている。空席もちらほらあるようだが座っている者は誰もいない。その異様な集団は皆喪服に身を包んでいた。

「……え。ちよっと……」

再度驚く。

奥に立つ、頬のこけた青白い顔の髪の長い女がその薄い胸に遺影を抱えて立っている。

葬儀の途中？

しかしそれにしても何故霊柩車にも乗らず、移動するにしても葬儀屋の準備したバスなりがあるはずだ。蜜は混乱した。

ゴトン、ゴトン、

ゴトン、ゴトン、

矢鱈に振動が背骨に響く。

蜜は居た堪れなくなつて視線を車窓の向こうに投げた。その瞬間トンネルへと入り視界は更に黒に染まつた。

「ひー」

窓硝子に映つた喪服の集団が一樣に蜜を見ている。白目の多い、そのくせ黄味がかつた眼で凝視している。

蜜は振り返ることができない。

その視線の真意を問い質すこともできず、見返そうにも数十人からいる葬列のいつたい誰に目を合わせていいものか。

途端明度が上がった。トンネルを抜けたのだ。

蜜が恐る恐る顔を車内に向けると誰一人彼女を見ている者はいなかった。喪服の一団は皆無感動な眼差しで外を見ていた。蜜は酷く強張っていた。音が漏れないように口吻を尖らせてすると息を抜く。

線香の匂いが先ほどよりも濃く感じられる。

なにかがヤバイ。そう感じた蜜は取りあえず次の駅で降車することに決め、とにかく俯いてこの場をやり過ごすことにした。

ゴトン、ゴトン、ガガッ、

物凄い音を立てて電車は鉄橋に差し掛かった。

鉄橋？

蜜は下を向いたままちらりと外を見る。確かに大きな川を渡っており、そしてその向こうに鬱蒼とした森が見えた。

蜜は声に出さず戸惑う。姉の住んでいた土地へと向かう途中に、

こんな大きな川などあつたらうか。確かに数えるほどしかこの電車には乗つたことはないが、渡河橋の存在などまるで記憶にない。そして思う。

「いったい前の駅を出てから何分経っている？」

次の駅に到着する気配はなく、車内アナウンスも一切ない。間違えて特急にでも乗ってしまったのだらうか。そんなことは多分ないのだとわかつていながらも、何とかこの状況を自分の理解し得るレベルにまで持っていきたい。

しかし幾ら考えたところで不可解なものは不可解でしかなかった。流石に蜜の背筋に冷たいものが走つた。

たとえ何かの都合で葬列の群れと共に電車に乗っているのだとしても。

この人数がいて皆が皆無言なのは流石におかしいだろう。

鉄橋を越えた。

深い森。

森の木々はトンネルのごとく密生している。

次の駅は見えない。

電車の走る音以外、無音。

ゴトン、ゴトン、

どこかで鈴の音がした。

「蜜。あんたのせいだからね」

身体をびくりと震わせて蜜は跳ね起きた。

隣に座っていた会社員風の中年男が怪訝そうな顔で蜜を見ている。いつの間にか電車で眠ってしまった。細かいところまでは覚えていないがとても不快な夢を見た。蜜は額に浮いた汗の玉を拭

った。背中もじんわりと汗ばんでいる。

あの遺影には、もしかすると姉が写っていたのかもしれない。するとそれを抱えていたのは自分だろうか。

気付けば携帯電話を握っていた手は汗でぐっしょりと濡れていた。動悸も荒くなっている。まさか日中の何気ない時間帯にまで悪夢に侵食されるとは思っていなかった。蜜は、恐怖と苛立ちの緋い交ぜになった厭な感覚に溜め息を立て続けにみつつ落とした。

そこで姉の住んでいた町に到着した。

蜜はふらふらとした足取りで電車を降りると、駅のホームでもう一度大きく息を吐いた。

電車が動き出す。

車内は夢とは違い、豪くがらだった。

「もう、ヤダ」

一番後ろの車両に遺影を抱えた青白い女が立っていた。濡れそぼったような長髪から覗く顔は、明らかな歯がみをして蜜を睨み付けながら電車と共に去って行く。

寝不足なのだから、幻覚も見よう。

ただこの何日か自分の周辺の世界で何かズレが生じているように思う。そしてそのズレはとても危険な感じが蜜にはした。

どうも今日は姉の部屋に行くのは控えたほうがよさそうだ。

蜜は駅のロータリーでタクシーを拾うととんぼ返りで石動の駅前に引き返した。

石動駅はなんだかわさわさしていた。

何かあったものか。いや違うこんなものだいつもと、蜜は頭の芯の疼痛を振り払うように二度三度と首を振った。

そこで声を掛けられた。若い男の声だった。

「はい...?」

蜜は内面の動揺を米噛を伝う一筋の汗ひとつで落とし、幾分上気

した顔を男に向けた。案の定蜜とそれほど年齢の変わらなそうな、少しにやけた雰囲気若い男が立っていた。

「あ。えっと」

若い男は明らかに蜜の容貌を見て、戸惑っているようだ。

男の方は長身ではないが、それでも蜜より頭ひとつ大きい。自分の胸の位置に若干上目遣いでこちらを見る、少女のような女。否、少女か。男は正直、自分はどうしてこの女性に話し掛けてしまったのだろうかと思っている。

まるでどぎまぎしてしまつて会話にならない。

蜜はただでさえ大きな瞳をさらに大きくして若い男を見た。表情には出ないが、ナンパならナンパで早く何かいえよと思っている。なんだか苛立ちが治まらないのでけちょんけちょんにいい返してやろうと腹の底で企みながら。

ところが若い男は、

「このへんに石畳つてバーありませんか？」

と、まさにこれから蜜が行こうと思つていた店について尋ねてきたのだ。

「石畳」

少し下膨れ気味の頬を軽くふくらませ、蜜は私もこれから行くんだけど一緒にいきますかと軽い微笑みをもって言葉を返した。

若い男はちらちらと蜜を見ながら、

エバキコウヘイです。

といった。

自分の迷いは他人に不幸を喚び込む。

そうでなくとも過去、自分と関わってきた者は大なり小なり通常社会では考え得ぬ目に遭っている。中には、今では生死の別も定かでない者もいる。一度はそれでも責任を取ろうかと思ったこともある。ただその責任の取り方だが、リヨウの偏向した知識の中をいくらかまざぐつてみたとこでびたりと嵌まる解決策はてんで見つかりはしなかった。

ヒトに仇なす存在を滅却せんと今まで来たが、はたして消されるべきは自分のほうではないのか。それは未だに思っている。反面、身体の芯に熾火の如く燻っている一念は、矢張り今一度タミコに会わねばならないという思いであった。

望まぬまま超絶な力を手に入れた彼の女と、話を。

タミコは人を燃す力を持っている。

その力をどのような経緯で入手したのかはリヨウなどにはわからない。ただその力が、到底常識的な方法で抗え得る類いのものではないということだけは十分承知していた。幸か不幸か今のところは、タミコはその力を無闇に行使することはなく、リヨウに関わりを持った、それも悪行と呼べる行いを犯した者だけに向けられてはいた。それがまたリヨウを惑わす。

過去に関わった者のひとり、タミコがただ闇雲に人間を焼殺するだけの存在になり果てていたほうが、今のリヨウの煩悶は軽減されていたかもしれぬ。

タミコの意思がどこにあるかはリヨウには測れない。

タミコに正義はあるのだろうか。

生きていくだけで害が生じる、そんな存在は在るだろう。自分がそうではないことを信じ、且つその横道は何故だかとても蠱惑的な匂いをもってリヨウを誘う。

無根拠であろうとも自分は真つ当だと信じ、常に歯を喰いしばつてこの穢土にしつかと両足を踏ん張っていないと息を継ぐ間もなく持つて行かれる。だからリヨウは、自分は正義であると常々自分にいい聞かせる。

足下に寝ていた猛者がむくりと顔を上げた。

リヨウは露出していた左腕を隠すため上着を羽織つた。

リヨウの左腕には無数の目玉がくっ付いている。

本来あるべき顔面には赤黒い肉の露出した穴がふたあつ穿たれているのみ。

ぎい、と扉が開いた。

「お久しぶり」

リヨウは眼球の嵌まっていない顔面のふたつの瞼を細め、薄く開いた扉の隙間から顔を覗かせた女を見た。実際女の姿を捉えているのは左腕に溢れんばかりに在る眼球群の幾つかであるが。

リヨウは足下の赤犬の様子を窺った。

猛者は警戒はしていないまでも彼女の、どうやら後方を気にしていた。

「後ろに居るのは」

リヨウは久し振りに訪れた（一応は）アルバイトの少女のような女にそう尋ねた。

「え？ あ、えと、駅前で、この店に用があるっていうから。ついでだし」

「なにいいてえのかわかんねえよ」

悪態を吐きつつリヨウは来訪した白ちっちゃい女の名前を思い出そうとしていた。

アツとかムツとかいったか。

蜜は日本人離れた雪のような白い肌に赤い頬を貼りつかせて、何か飲み物あるかとリヨウに尋ねた。

蜜の後ろに隠れるようにして立っていた青年は酷く怖ず怖ずとしており、用事がある割には店の中に入ろうともしない。ただリヨウにしても、そんな何処の誰とも知らぬ者に払う気遣いはない。本当に用があるなら厭でも口を開くであろう。

案の定青年は、やや蜜に促される格好で口を開き、先ず餌場木公平といいますと姓名を名乗った。知らない名前だったが、どうやら青年のほうはリヨウを知っているようだった。

「どこかで会ったか？」

多分自分と同じくらいか、少し上くらいだろうか。どうでもいいことであるのに、どうして他人の年齢を気にしなくてはならないのか。リヨウは不図自分に問う。普通の人間もそういうものなのか、と。

まるで一般的な社会性というものを身につける機会のなかったリヨウは、おのれの発する言葉に気を遣う。気を遣うが所詮語彙が少ない上、大概会話の途中でその気遣いが億劫になってくるので自然とぶっきらぼうな粗雑な口調になることが多かった。特異に過ぎる風貌に加え、受け答えがそれでは相手に脅威を抱かれるのは明白白である。

実際公平は少し戦っているようだ。

「ちよつと、コーラもなんもないじゃん」

冷蔵庫を覗いていた蜜が不機嫌そうな声を上げた。リヨウは特別なにも返さない。

もさはちらちらと公平を気にしてはいるが、どうやら害なしと見たかふんと鼻から息を漏らして再び寝に入った。

公平はリヨウの顔を正視することができず、天井や壁にいたずらに視線を飛ばしながら、

「こ、この店のことについて聞きたいのですが」

と、酷く小さな声でいった。

「悪いな、俺もそんなに詳しくねえんだ」

リヨウは矢張りぶっきらぼうに返す。

「そうなんですか…いや、あの。むかしこの店の常連だった男なんですが」

と、公平はその常連客とやらの名前を挙げた。それは彼が個人的に調べた、あの子供を虐待死させた可能性のある男の名前だった。とはいっても一切何の確証もない。公平は自分のマンションの周辺の、病死も事故死も含めた、あの子供の霊と年齢の似ている男児の死亡記録を具に調べ上げ、自作のリストの上から順に虱潰しに当たっているだけだ。

今調べている男も過去、公平のマンションの周辺に暮らしており且つ年格好の似た子供を亡くしている。記録には病死とあった。

リヨウは再び知らぬと答えた。

公平は怖れながらも対話者の様子を観察した。

なんとも胃の腑の重くなるような独特な存在感を放っているものの年齢は自分とそう変わらぬようだ、と。

「…あなたはこの店の？」

「あ？」

「…いや、あの…」

言葉尻を濁したのに意味はない。しかしリヨウには伝わらなかつたようだ。

リヨウは煙草を吸った。

公平は何故か、そのリヨウの煙草を吸う様に視線を送る蜜の様子が気になった。

「なんでその男のこと調べてる？」

「…え？ いや。まあ、ウン」

またも公平は言葉を濁す。その裏には、いっても信じてもらえぬだろうという諦観が多分に含まれていた。そしてそれ以上に、他人に奇異な目で見られるのが厭だった。たとえこの先再会することのない人間であったとしても、公平にとつて他人に好奇の眼差しを向けられることは何物にも替え難い苦痛なのだ。

「…ええと、あの。知り合いの…ってもそんなよく知った知り合い

ではないんですけど…」

「前置きはいいいよ」

「…或る男の子がですね、どうも親に虐待されて亡くなったというか殺されたというか」

虐待死。それとて何等確証のない話。しかし公平の中では既に過去の事実として確定しているようだ。

「僕はまあ、その子を殺した犯人を探しているんです」

蜜は床に目を落としている。なんとも様子がおかしかったが、それを気に懸けてやるほどリヨウは蜜のことを知らなかった。

「その犯人とやらがこの店の常連だったと」

「そ、その可能性があるっていう、その程度のもんです」

のべつはつきりしないものいいに、リヨウは少し苛立ちを覚えはじめていた。

「そうかい」

然して興味もなさそうにリヨウは下唇を突き出して煙を吐きだした。手の指にできたささくれを笔る。

蜜はその不毛なやり取りをやや湿り気を帯びた目で眺めつつ、大きな溜め息を落とした。上着に隠れた、リヨウの左腕の際立って大きなひとつがその姿を捉える。

公平はこれ以上居ても無駄と判断したかほば無声音でどうやら謝意を述べ、首だけで会釈して後ろ手に扉を開け静かに出ていった。

「なんであんなの連れてきた」

「あんなのって。だってこのお店のこと聞かれたし。別に危ない人じゃないじゃん」

「ふん」

蜜のいう危ないがどういったものなのかはリヨウにはわからない。ただリヨウには、公平のどんよりと濁った目がとてもまともには見えなかった。

なにか良くないモノを背負っている。しかし自分には関係のないことだと、リヨウは煙草を揉み消した。

「…ねえ。前から聞きたかつたんだけど、」

蜜は無意味に公平の出でいった扉に目をやり、リヨウってさ目、見えてるよね？」

何故今このタイミングでその質問をするのだろう。あまり生身の女と交渉のないリヨウは若干その脈絡のなさに戸惑う。

「見えてるでしょ？」

一方の蜜は無邪気なものである。くだらない質問をするということは、姉を亡くした傷は癒えたのだろうか。リヨウは答える替わりにそんなことを思った。

「ねえつてば。聞いてる？」

リヨウの返答がまるでないのに業を煮やしたのか、蜜は半歩身を寄せた。

この娘、おそらく普通の感覚よりも対人結界の幅が狭い。リヨウのような赤の他人でもそうなのだから、この娘の周辺にいる男友達などはことごとく勘違いすることだろう。

「聞いてるの？」

どうでもいい質問だろうに蜜は食い下がった。リヨウはしばらく顔を下方に向けていたが、

「百目って知ってるか？」

「ヒヤクメ？」

蜜は桜色の薄い唇をアヒルの嘴のように曲げた。どうやらそれが何らかの意思表示であるようだが、無論リヨウには伝わらない。

リヨウは鼻から息を漏らす。

そう。別に隠しているわけではないのだ。無用な面倒事や煩雑な説明を忌避する為に人目に曝さないようにしているだけで…

リヨウは羽織っていた上着を脱いだ。

蜜の息を吸い込む音が聞こえる。

「…え？…目？」

目。目。目。目。目。目。目。目。

「そ、それは生まれつき？…病気じゃないよね」

「俺はヒトじゃねえんだ」

「どういこと?」

「妖怪」

「…妖怪?」

正直蜜はどう返答していいかわからないのだろう。明らかに当惑している。しかしその目はしつかとリヨウの左腕に注がれていた。作り物ではない、しつとりと潤いを含んだリヨウの眼球群も蜜のあどけない顔を捉えている。

いいだけ無音の時間が流れ、薄暗い天井付近に一度蜜の空唾を嚙下する音が上がった。

「…で」

「…で? なにがだ」

「私にどうしろって?」

「どうもこうもねえよ。見えてるかどうか聞かれたから答えただけだ」

「そう、よね」

一見落ち着いた受け答えをしている蜜だが、実際は許容量を大きく上回っている故の、混乱を極めた故の冷静な対応である。血の気が引いてまともな思考回路が機能していないともいえる。

蜜は米噛みのあたりに浮いた汗の玉を手の甲でそつと拭った。

「妖怪って、人間に悪さするんだっけ?」

とても大雑把な質問である。しかしそれは漠然と正義を標榜するリヨウの決意とそう違いがないのかも知れなかった。リヨウは思わず笑ってしまった。

「なにがおかしいの?」

「いや。別にな」

「私は真剣に聞いているのに」

「悪い」

妙に居心地の悪い空気が漂う。リヨウはそれを払うようにまた煙草に火を点けた。別に何かを待っているわけでも期待しているわけ

でもない。

蜜は床の一点を見つめながら、なにやら必死に考えている様子。  
ややあつて、

「さっきの人。エバキ？ 私もあの人と同じ」

そう前に落とすようにいった。

「私もお姉ちゃんを殺した奴を見つけない。見つけて…」

「殺したいか？」

蜜はこつくりと頷いた。

「殺して姉ちゃんが帰ってくるわけじゃねえだろ」

そういつつリヨウには、蜜の思いはすんなり理解できる。なに  
かを壊さなくては治まらぬ衝動というのはあるものだ。いいことでは  
ない。結局破壊欲求など、どんな世の中だろうと悪でしかない。  
只理解できるだけだ。

「やめとけ。多分もつと傷つく」

自分でもやや上滑りしている言葉を吐いていると感じている。リ  
ヨウはそれを誤魔化すかのようにまた煙草に火を点けた。しかし火  
を点けただけで吸うでもなく、ゆるゆると立ち上る煙を見るときな  
しに眺めるばかりだ。

「私が傷ついたって、リヨウには関係ないでしょ」

「そうだな」

「いわれなくつてもわかってる。なにやっただってお姉ちゃんは帰っ  
てこないし、私の後悔だつて癒されない。それでも…だからこそな  
んかしてないかどうかかなりそうなのよ」

「そうか」

「…なによその達観した感じ。ム力つく」

「ふん、達観だと？」

まるで程遠いとリヨウは腹の底で、未練がましく諦めも悪く優柔  
不断な自分を笑った。自分で自分をどう思っているかと他人の目に  
は別物に映るらしい。悩み続け、未だ煩悶と後悔と苦悩の日々を送  
つていても、おそらく他人の目には何事にも動じない虚像がリヨウ

の実として存在しているのだろう。世の中どうやらそんなものであるらしいことはこのところわかりかけている。そして、それならばその虚の部分を巧く利用してやるうという強かさや計算高さをリヨウは徐々に身につけつつあった。

蜜は酷く激昂して、

「わかったわよ！　ひとりで探す！」

と叫んで出ていった。リヨウは無論追いはしない。蜜がどうなるうと知ったことではない。リヨウにはリヨウのやらねばならぬことがある。

もさがリヨウを見つめている。その黒い瞳はなんだかりヨウを蔑んでいるように見えた。しかしそれはリヨウの思い込みで、結局は自分の後ろ暗さを犬の目に投影しているに過ぎない。

扉が開いた。

リヨウはてっきり蜜が戻ってきたものだと思ったが、それは違った。

「陵霊」

長身の、毒気のない笑顔をした男だった。

リヨウは何かを感じ、スツールからぶら下がっていた両足を床に付けた。

対峙するとリヨウより頭ひとつ大きい。身体の幅こそ変わらないものの、矢鱈に姿勢がいいせいかな実際の身長よりも高く感じられる。リヨウの足元で寝ていた赤犬、猛者の目つきもやや鋭さを帯びている。

顔つきこそ聖人のごとくだがこいつは…リヨウは身構えた。

「あんたは」

「申し遅れました、私駒場祐一郎と申します」

リヨウにはまるで覚えのない名前だった。一方の駒場は、リヨウの左腕を見ても眉ひとつ動かさないでいる。それだけで通常の来訪者でないことは知れた。

「用件は」

「ある女性を探しています」

「女？」

「潤目民子。ご存じでしょうか？」

リヨウはどきりとする。しかしその動揺は表層に出る前に騒がしい音にかき消された。派手に扉を開けて蜜が戻ってきたのだ。

「な、なによ。忘れ物とりに…」

誰も何も問うていないのにいい訳をする蜜を、駒場は半目になって見つめている。

「失礼ですが、貴女は？」

なんとも柔らかな耳触りのいい声音でそう問う駒場の手元がそろそろと動くのをリヨウは見逃さない。

「雨居蜜だ」

蜜に代わってリヨウが答える。

「アマイミツ。そう、なんですか？」

先ほどまで自分も居た空間の、この変わり様はなんなのだろう。空気が少し重たい。そんなことを考えながら蜜は一度リヨウを見、そして長身の男を見た。

作り物のような顔をしている男だと思った。

好みの顔ではない。

「誰？ リヨウの知り合い？」

駒場は手に握った紙片の幾つかを指に挟んだ。

「私は彼を知っていますが」

蜜が感じた不穏な空気はどうやら眼前の男から発せられているのは間違いないようだ。蜜は再びリヨウを見た。

「用が済んだらとっとと帰れ」

それは蜜に向けられた言葉。もとより蜜もそのつもりだったが、そのいい方がいかにも横柄だったものだから蜜もついつい意地を張る。

「帰りたくなったら帰るから。ほっといて」

すると駒場までもが、

「お帰りになられたほうが善い」

などというものだから蜜はますます意固地になって、リヨウの席に置いてあった煙草をひったくると一服点けて見せた。噫せることこそなかったが見る間に顔が青褪めていく。リヨウはちらとその様子を見ただけで特別声は掛けず、駒場の動きに神経を払い続けている。

「ウルメタミコの所在はご存じない？」

「ふん。こつちが教えてもらいてえ」

「そうですか。残念です」

いいながら駒場は音もなく横移動を開始した。

「余計な動きはすんな。黙って出て行け」

「残念ながら命令される覚えはない。ヒトであるならまだしも、妖怪である貴方に」

一枚、もう一枚と手に持った紙を床に落とす。まるで何かの儀式のようだ。その動きにいつたいたいどのような意味があるのかリヨウにも蜜にもわからない。ただ猛者のみが背中の筋肉を盛り上げ低く唸っている。

十四と十六。漢数字の書かれた人形の紙片。

呪いか。

「私はね、陵霊。件のウルメタミコに愛しい者を燃やされたんです」  
リヨウは実に静かに言葉を呑んだ。

蜜には駒場のいつている意味がわからない。ウルメタミコは放火犯で、などといった想像は多分見当外れのような気がしたのですぐに打ち消した。

「タミコに燃やされたってことは、それなりのなにかをやっちゃまったってことだろ」

日常会話でありえない内容はしかし、対峙するふたりの男の間で成り立っている。

そう。今やヒトではない件の女、ウルメタミコはおのれの善悪の基準のみを憑拠に悪を燃やす存在となり果てていた。

「なにか？ なにかとは？ いったいヒトがヒトを焼殺してもいいなにかとはいったい何だと仰られるのです？」

駒場は俄かに興奮しはじめている。彼の足もとのヒトガタは風もないのに揺れている。

「そんなもん知るか。だから俺は奴を探してる」

嘘だ。リヨウはただタミコと会いたただけだ。とはいえ実際、それほどまで積極的に探しているわけでもない。今のリヨウは豪く中途半端で、何もかも少しだけ投げやりだった。

「探している？ 待っているの間違いでしょう」

「どつちでもいいぜ、そんなもん」

リヨウは蜜の手から煙草をもぎ取ると火を点け深くひと吸いして、ぱいと駒場の足もとの二枚に向け放った。

矢張り風もないのに紙片はゆらりと舞い、火種から逃げたように

リヨウには見えた。

「呉々も妙なことはするな」

「しかし貴方は、ヒトには危害は加えないとそう決めてるのでしょう？」

「どうなさるおつもりでと、駒場は少し大仰な仕草で空笑いをして見せた。

「私がどうしようもない悪党で、もしこの店を破壊しに来たのだとしたら？」

リヨウはむつつりと答えない。そんなものは過去何度も自分自身に問うてきた問題であるからだ。そして未だに明確な指針は得られていないままだ。

「どうなさるのです？」

「仮定の話をする気はねえ」

「そうですね。まあ確かに、私はこの店を壊しに来たわけではない。貴方に深い関わりのあるウルメタミコに激しい恨みを抱いているといえども、それなりに分別もあるつもりです。しかしそうした態度でいられると、流石に私も」

駒場は伏し目勝ちの目で蜜を見た。

「俺の態度が気にいらねえなら、俺ンとこに来い」

今にも亀裂が入りそうなほど空気が張り詰める。

蜜は身動きが取れない。

かさかさとした紙のヒトガタが明らかに動いている。

「はは。ご安心を。私もヒトは襲わない」

「そうかい。それはいいことだ」

「ですが」

かさ。

「私の扱うモノは、時折私の抑制が利かなくなることがあります」

そのモノとは駒場の足元で先から不穏な動きを見せる二枚の紙きれのことだろう。リヨウは勿論、猛者もそれに意識を向けたままだ。

「それは脅しか？ あ？」

駒場の悠揚とした話し方が既に鼻につきはじめているリヨウは、若干の怒気を孕んだ声音で言葉を吐く。その様子を更に泰然とした態度で眺めて後、駒場は矢張りゆったりとした口調でこういった。「私は未だ修業の身。恋人を奪われたショックから力を得ることばかりに腐心し、力のコントローラは二の次にしてしまっただんですね。これは脅しではなく、警告です」

警告。リヨウはそうぼそりと呟いて、ばきりと奥歯を噛んだ。

「ナニサマだてえんだ、てめえ」

そのリヨウの静かな激昂を、駒場は薄い瞼の動きひとつで制した。

「聞け陵霊。私はウルメタミコをこの世から消す」

「恋人の敵だからか？」

「邪魔はしないでもらいたい」

「させねえよ」

素直に聞き入れて貰えるとは思ってませんと、続けて駒場は口中何かを呟いた。

十四と十六のヒトガタが一度宙に舞い、猛者の周りを旋回しはじめた。

猛者は唸り声を発しながらその二枚を眼で追い続けるも、あまりに高速に執拗に廻るものだから、一瞬、ほんの一瞬だけ眼球がついていけなくなり、

「おい！」

リヨウは床を蹴った。

ほんの一步半ほどの距離だったが。

猛者の体はふわりと浮き、そして。

蜜のひきつけのような悲鳴。

リヨウの全身が猛者の血飛沫でしとどに濡れた。リヨウは一瞬にできた血溜まりに足を取られてもんどり打って地べたに転がった。

猛者の体は跡形もなく消し飛んでいた。

どうした方法を使ったのかはわからないが、二枚の紙片がそつと駒場の手の中に戻っていったのをリヨウは見逃さなかった。

「てめえ」

「可愛がつておられたわけではないでしょう？ あれは魔物だ」

魔物とは無論赤犬猛者のことであろう。

蜜が息を吸いながら酷いと呟いた。

「私は魔物を消すことに些かの躊躇もない」

蜜が半泣きの顔でいう。

「酷いよ！ もさちゃん、いい子なのに！」

「いい子ですか」

「いい子よッ。マモノだろうとなんだろうと、あんに命を奪う権利はない！」

「権利など無用。説明も釈明も一切する気はありません。特に貴女のような小娘には」

「なっ……」

駒場は細長い指の付いた手のひらを我が胸に宛て、まるで演じるがごとくに朗々とした声でいった。

「私は私の為すべきことを為すために存在している」

そしてやはり演劇のような仕草でリヨウを指差すと、

「邪魔をすれば陵霊、貴方もこうなる」

リヨウから血溜まりへ指を下げる。その間、一切蜜は顧みない。

駒場には何の興味もない存在だからだろう。

「リヨウ！」

リヨウは血塗れのまま立ち尽くしていた。

「リヨウ！ どうにかしなよ！ このままじゃもさちゃんが…可哀想」

駒場は手元に戻った紙の二枚をそつとしまつと、くるりと踵を返した。

「リヨウ！」

「警告はしましたよ」

「リヨオオツ！」

駒場は音もなく出て行った。

蜜は大きな瞳に涙を溜めて、

「馬鹿」

とだけ残して、やはり店を後にした。

ひとり残されたリヨウは血塗れの顔を拭うこともせず、

「俺の迷いは多分……」

血溜まりの中から大きな牙をひとつ拾い上げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3036e/>

---

100eyes'undergroundsuperhero

2010年12月4日15時52分発行